

司法省
總務局
文書課

235

獨逸訴訟法釋義 第六

小松濟治譯

文書課

司法省文庫			
和書	政治及法律部	三六四號	共一冊
架	函	架	冊



第百二十三条

準備各面交換ノ時期ニ関ス

ル条

新タナル事案ノ供述又ハ他ノ新タナル供述ヲ
 記載スル準備各面ハ口頭対審前募クモ一週間
 ニ於テ送達ス可シ若シ其各面附帯訴訟ニ関ス
 ルモノナル時ハ募クモ口頭対審前三日ニ於テ
 送達ス可シ

新タナル供述ニ対スル反駁ノ辨明ヲ記載スル
 準備各面ハ口頭対審前募クモ三日ニ於テ送達
 ス可シ若シ其各面附帯訴訟ニ関スル反対ノ辨
 明ナル時ハ之ヲ送達スルヲ要セス

第一解理由ノ説明 本条真最短期限ヲ明示ス
ルニ本条第百二十四条ニ依リ更ニ之ヲ短縮ス
ルコトヲ得ハシ且此期限ハ本条ニ於テ特更ニ
送達期限ヲ確定シテ示サ、ル各親ニ付テノ
し有効ト為スナリ必ス必復ナル準備各親ニ
関シテハ一し其送達期限ヲ確示ス〔本条第百二
百三十四条第百四十四条第百八十一条
第百四十八条第百五十七条第百五十九条
第百四十八八条参看〕
抑準備各親ヲ对手人ニ送達スルノ手續ヲ省
略シテ之ヲ為スト雖モ必スヤ其本件ノ自体
ニ權利ノ毀損ヲ招キ致サ、ルコトハ準備各親

ナルモノ、性復ニ於テ然ルハキ所トス〔本条
第百二十四条第百一条参看〕其送達ノ適当ノ時期
ニ於テ為サ、ル場合ニ在テモ亦同シ〔全条第
三解参看且反訴ノ送達ノ適切スルモ亦文
ニ同シキナリ〕加之此口頭对審ノ準備ニ係
ル規則ニ恪遵セスト至モ後々敢テ本件ヲ毀
フ所ナキナリ然レ氏原被告若シ此条第百二十
条乃至第百二十五条ノ規則ヲ守ラヌ為メニ
豫定ノ对審期日ニ於テ本件ノ審理ヲ完了セ
シメザルニ至リタル時ハ其怠慢ニ因スル費
用殊ニ期日更定ノ費用〔本条第九十条参看〕ヲ
負担セザル可ラヌ然リ而テハノ一ツル國草

按茅百二十六条茅百三十四条バデニ國訴訟
込茅十九条ウユルテムベルグ國全上茅百八
十七条茅百九十八条ニ模倣セル所ノ北部地
乙聯邦草按茅三百六条ニ

原被告若シ本件ニ付キ完全ナル審問ヲ受
ケ能ハサルコトヲ申立殊ニ相手人ヨリ各面
若クハ証唇ノ通示若クハ呈供ヲ適當ノ時
期ニ為サヌ又ハ新タニ供述スル所アルニ
因テ更ニ反駁ヲ為サシムルヲ必要トスル
時ハ申立ニ依テ口頭對審ヲ延期スルコトヲ
得

トアル規則ヲ本込ニ於テ採用スヘキ必要ヲ
見サルナリ是等ニ関シテハ本込茅二百五条
茅二百六条ノ通則ヲ以テ足リトスヘシ必
竟各類其他ノ通示等ヲ適當ノ時期ニ於テ急
ヲ為サ、ルコトハ即テ對審期日ヲ更定シ又ハ
延期スルノ申立ヲ為スニ適切ナル著シキ原
由本込茅二百二条茅二項參看ト為スニ足リ
得ヘケレハナリ

〔第二解判定ノ沿革〕 本条ノ主義ニ於テハ各
草按皆同一ナリ而テ北部地乙聯邦草按茅四
百十八条ニ於テハ附帶訴訟ニ付テ特別ニ詳
細ノ規則ヲ定メアリ又其茅三百六条ニ関シ
テハ上ノ茅一解ヲ參看スヘシ而テ國議院委

負合ニ於テ該条ヲ本法ニ採用セントノ動議アリシモ發議者遂ニ自ラ棄却シタリ故他本条ニ付キ更ニ異議ナシ

〔第三解附帶訴訟〕(本各九例參看) 並附帶訴訟

ハ本案原告同ニ於テモ〔本法第四十五條第六十八條參看〕又ハ第三者ニ係リテモ〔本法第一百二十二條第一解第二項參看〕口頭對審ヲ為シ又ハ之ヲ為サスレテ起シ得ルモノトス而シテ亦本条只其口頭對審ヲ為ス附帶訴訟ヲ指スナリ口頭對審ヲ為サストスレハ準備各面ノ交際モ之アラサルヲ以テノ故ナリ

〔第四解期限ノ計算〕 期限ノ計算ニ付テハ本

法第九十九條乃至第一百一條ヲ參觀ス可シ

第一百二十四條 準備各面ヲ裁判所ニ呈供ス

ルノ条

原告被告ハ受訴裁判所ニ留ム可キ準備各面ノ謄本及ヒ附屬各書類ヲ裁判所各記局ニ呈出ス可シ若シ期日ノ指定又ハ送達ハ裁判所各記ヲ經由シテ為ス可キ場合ニ於テハ真正本ノ提出ト同時ニ其他ノ場合ニ於テハ各面送達ヲ為シタリ右直チニ前項ノ呈出ヲ為スモノトス

〔第一解理由ノ説明及ヒ判定ノ沿革及ヒ解裁

字漏生國單據ノ理由説明ニ曰

騰亦一部ハ之ヲ受許裁判所ニ呈出シテ以
テ亦裁判所ヲシテ準備ヲ為シ得セシメ乃
ク審理ニ付テ適當ノ処理ヲ誓留セシメサ
ルノ準備シ得ルヲ云々

此他ノ理由説明ニ奉ル所ハ即ケ本条第百二
十一条第一解第一項ニ該述セル所ノ外ニ出
テス然リ而テ國議院委員ノ各議會ニ於テ本
ノ規則ニ付キ劇烈ナル議論アリタリ乃ケ本
条維持ノ論者ハ從來各面審理判ノ行ハレタ
ル邦國ニ此新定訴訟ヲ実施スル為メニハ
本条缺ク可ラスト主張シ又反對論者ハ本条

ハ口頭對審判ヲ裁スモノナリト論シタリ遂
ニ大多數ヲ以テ本条ノ維持ニ議定シタリ
著述者多年ノ経験ニ依テ觀察スルニ蓋本条
ハ美ニ痛歎スヘキ規則タルヲ免レス然レ氏
然タル口頭對審判ニ慣熟スル時ニ到ルマ
テノ推遷時期中ハ缺クヘカラサル救急訟ト
云フヘシ若シ口頭對審判ニシテ猶ホ訟朗而
訴訟訟ノ行ハル、秘乙各部ニ於ケルカ如ク
裁判官及ヒ代官人カ慣習シラズルニ至レハ
則ケ本条ノ「倚杖」ハ自ラ其迹ヲ歛ムルヲ得ヘ
レ
然リ而テ本条ノ弊害ヲ防遏メンカ為メ本条

ニ於テハ彼ノ「レ」イレンテニ判（裁判及茅見レ習テ
官吏タル）ヲ更ニ奉示スルコトヲ且裁判所編
者ヲ更ニ奉示スルコトヲ且裁判所編
判決茅百九十九条茅一項ニ於テ他事ニ就テ
僅ニ此レフイレントヲ先スコトヲ定メアルニ
過キサル所及ヒ公平不偏ノ裁判官ハ必ス惟
其對審期日ニ於テ親聽シタル供述ニ因テノ
し裁判スルヲ得ルノ判アル所（本訟茅百十九
条茅四解參看）ヲ輕ニ看過ス可ラス実ニ若シ
常ニ「レ」フイレントヲ任命シテ勿テ本訟茅二
百八十四条茅二項ニ依テ為シ得ルカ如ク其
レフイレントハ準備台面ニ基ツキテ為シタ
ル裁判及ヒ其原由ヲ對審席ニ供出スルモノ

トセハ即テ口頭ノ對審ハ虚飾ノ一演劇タル
ニ過キサルハシ果レテ然ル所ハ兎モ角全備
セハ各類ヲ要トスル台面上ノ審理判ニ比スレ
ハ更ニ劣レルモノナルハシ且漸ク代言人等
モ其實際ヲ看破スルニ至リテハ努トメテ口
頭ノ陳弁ヲ簡短ナラシメ殊ニ繁壯ナル裁判
所ハ對審ノ長キニ且ルヲ好コサルニ於テハ
益之ヲ省畧シ又裁判所台記モ亦其好ム所ニ
怛怛シ（即テ本訟茅百四十六条茅二百七十条
ニ依テ特定セラル、モノ、外）口頭對審ハ準
備台面ニ奉クル所ニ異ナルナレトノ程式ヲ
濫用スヘカラシ（本訟茅百四十五条及ヒ其註

解参看

乃ケル如シト虽モ尚ホ其程式ハ之ヲ尽シタ
ルナリ然レ氏法律ノ目的ハ遂ニ達セスト云
フハレ

是ニ於テ予即ケテ実施ニ係ル宣令ヲ以テ如
キ又ハ之ヲ類スル弊害ハ嚴肅ニ禁遏セサル
可ラサルナリ

〔第二解騰本及正本〕 立証々各ニ関シテハ
本添第百二十二条第二解第廿解ヲ参看ス可
シ而テ本添ニ於ケル實際処理ノ手續ニ於テ
理会スハキハ即ケ

期日ノ指定ニ付キ又ハ送達ニ付キ裁判所

各記ヲ經由シテ為スハキ時ハ〔本添第百九
十三条及レ第百五十二条参看〕則ケ其原被
告ハ準備各面ニ通テテ訴裁判断ノ各記ヲ
ニ呈出ス〔本添第百九条第一解第三解参看〕
而テ其一通ハ之ヲ裁判所記録ニ留ム既ニ
期日ヲ指定シタル後代言人訴訟ニ於テハ
其二通ヲ呈出人ニ還却ス呈出人之ヲ受領
シ指定ノ期日ヲ記入シテ再ニ裁判所執行
吏ニ付與スルナリ他ノ訴訟ニ於テハ裁判
所各記其期日ヲ追記シテ之ヲ執行吏ニ交
付ス
其对手人ニ交付スハキ各面ヲ騰本ト稱呈

其呈出人ニ送付スヘキモノヲ正本ト稱ス
而テ其正本ニハ執行吏送達セルコトヲ証明
シ且ツ之ヲ呈出人ノ手ニ留ムルナリ又対
手人ニ送達スヘキ謄本ニハ執行吏送達証
ノ謄本ヲ付シテ對手人ニ交付ス〔水添第百
六十六條參看〕

若シ期日ノ指定ヲ要セサル場合ニハ即チ
呈出人ハ終ニ再ヒ交領スヘキ正本及ヒ対
手人ニ送達スヘキ謄本ヲ裁判所執行吏若
クハ經由スルヲ要スル裁判所登記ニ交付
スル時同時ニ裁判所ニ留ムヘキ謄本ヲモ
併セテ呈出ス其中二通ニ付テハ上巻ノ手

續ニ送付之ヲ処理スルナリ

〔第三鮮裁判所登記局〕〔水添第四十四條第四鮮
參看〕 裁判所登記ナル官吏ハ本條其他水添
第百二十四條乃至第百二十六條第百五十二
條以下ニ於テハ更ニ重要ニシテ且自立ノ職
事ヲ担当スルモノトス

第百二十五條 〔証書ヲ裁判所ニ呈供シ置ク
ノ條〕

原被告其準備局面中ニ列挙シタル証書ヲ自ラ
所持スル場合ニ於テ適當ノ時期ニ方テ要求セ
ラル、時ハ口頭對審前之ヲ裁判所登記局ニ呈

出シ置キ且ツ其呈出ニ付テ相手人ニ通知ス可
シ
相手人ハ其証各展覧ノ為メ三日ノ期限ヲ有ス
此期限ハ申立ニ依リ裁判長ニ於テ伸縮スルコ
トヲ得

第百二十六条

証各ヲ相手人ニ通示スルノ

条

代言人証各ノ通示ニ付キ自ラ互ニ文憑証ヲ出
シテ閱覽スルハ其随意ニ任カス
代言人閱覽スル証各ヲ一定ノ期限内ニ還却セ
サル時ハ申立ニ依リ豫メ口頭對審ヲ用キ違ニ

還却ス可キ言渡ヲ受ルモノトス
此附帶ノ裁判ニ對シテハ即時ノ抗告ヲ為スコ
トヲ得

第一解理由ノ説明(本法第百二十二条第一解

參者)及ヒ判定ノ沿革(北部独乙聯邦草案ニ

於テハ此第百二十五条第二項ノ短キ期限ヲ

定メアラス且此第百二十六条第三項ヲ他ノ

条下ニ移シアルナリ他ハ各草案皆全ク同

一ナリ而テ國議院委員會ニ於テハ更ニ異論

ナシ又會議筆記録第百四十九丁第五十丁ニ記

載シアル所ハ後日本法第百七十六條ノ修正ニ

從テ今ヤ不用ニ屬セリ(本法第百七十六條第二

解参者

〔第二解委任状〕 委任状ヲ呈出スルハ代官人
訴訟ニ於テ相手人其他ノ訴訟ニ於テハ裁判
所之ヲ要求スル時ニ限り必要トス〔本条第八
四条参者〕乃ク仮令準備局面中ニ委任証ニ付
テ列挙セラ論スル所アル氏然カモ之ヲ呈示
スルコトハ為サスレテ可ナルヲリ故ニ北部独
乙聯邦草案第九十一条第四項ニ反シ本条
第九十一条第二十三条ニ於テハ訴訟委
任証局ヲ明示セサルヲリ然レ氏相手人之ヲ
要求シ又ハ裁判所之ヲ命スル時ハ必ズ連ニ
其委任証局ヲ呈出シテ裁判記録ニ添付セサ

ル可ラス〔即チ本条第七十六条ノ且之ヲ裁判
所記録ニ添付セザム可シトアル明文及ヒ該
条第九十一条第二十三条参者ス可シ〕必ズ訴訟委任
証局ハ此第九十一条第二十三条第九十一条第二
十六条ノ趣義ニ適當スルモノニ非ラサルヲ
リ何ントナレハ本条第七十六条ノ彼ノ追加
ハ各負ノ第九十一条第二十三条ニ至テ初テ成立タルレ
ハナリ独リ此第九十一条第二十三条ノ裁判所ニ呈出
シタル後相手人ニ通知ス可キ規則ハ委任証
局ニ付ラモ亦之ヲ適用ス可キナリ
訴訟委任証局ノ呈出ヲ拒ミタリトシ本条第九
十一条第二十三条第九十一条第二十三条ニ依リ之ニ言渡ヲ為サス

シテ却テ却テ却漏スル代理資格ノ原則ニ從テ
理ス可キナリ〔本法第八十四條第一解乃至第
五解及ヒ第八十五條參看〕

〔第三解解説〕此第百二十五條第百二十六條
ニ對スル解説トシテ概シテ第百二十二條ノ
註解ヲ見ル可シ

〔第四解展限ノ期限〕此第百二十五條第二項
ノ期限經過スル片ハ証各預リ人ハ其還付ヲ
求メ得又對手人ハ之ヲ展限セルト否トニ拘
ハラス必ス其証各ニ付テ弁明ヲ為サ、ル可
ラサルナリ
抑証各ニ裁判所ニ預ケ置クヘキコトノ請求ハ

必ス適當ノ時期即チ其之ヲ期限間為シ能フ
ヘキ時期ニ於テ為サ、ル可ラス而テ此請求
ハ對手人ニ直接ニ為スヘキモノニシテ裁判
所ニ之ヲ申立ルハ必竟裁判長其竟見ニ依リ
預期限ヲ伸縮スルニ便ナラシメンカ為ムノ
ニ若シ對手人此請求ヲ遲列シタレ時ハ對審
席ニ其証各ヲ提出セシムルヲ以テ満足セザ
ル可ラサルナリ

〔第五解証各ヲ直接ニ通示スル〕此第百二
十五條ノ規則ニ從ヒ証各ヲ裁判所ニ預置ク
テヲ為サスシテ第百二十六條ニ依リ對手人
ニ自ラ直接ニ即チ裁判所執行吏ニ由ラスシ

テ送達スルヲ得而テ其之ヲ受領セシム者ハ
之ニ対シ受領証ヲ出タサ、ル可カラサルナ
リ
内閣代理負負問ニ答ラ曰第百二十六条ノ趣
義ハ若シ対手人ニ於テ其証各ヲ紛失セシム
ル如キトアル時其之ヲ送達シタル代官人ニ
於テ其責ニ任ス可キ意ニシテ乃チ該条ハ原
被告ノ關係ニ付テ規定シ本人ト代官人トノ
間ニ付テハ更ニ于涉セサルナリ然レ
ハ則チ代官人若シ此第百二十六条ノ規則ヲ
実施セント欲セハ頗ル鄭重慎重ヲ要スヘキ
ナリ

即時ノ抗告ニ付テハ亦訟第百四十条ヲ參
看スヘシ

茲証各還却ノ附帶訴訟ノ強迫執行ハ亦訟第
百六十九条ニ從テ若シ之ヲ執行セサル時
ハ亦訟第七百七十八条ニ拠リ損害要償ノ訴
訟ヲ起スニ至ルヘシ乃チ茲第百二十六条ノ
權利ヲ実用スルニ付テハ注意ヲ促カスヘキ
所モ亦這裏ニ存スルナリ

第百二十七条 口頭對審ニ關スルノ条

裁判長ハ口頭對審ヲ命キ且シ之ヲ整理スルモ
ノトス

裁判長ハ發言ヲ許スレ又命令ニ従ハサル時ハ
其發言ヲ停止スルコトヲ得

裁判長ハ其事件ニ付キ辯論ニ遺漏ナカラシメ且
對審ヲ中斷スルイナク終結スルニ至ルヲ努
トム可シ必要ナル場合ニ於テハ對審ノ継続ノ
為メ直クニ開廷ヲ指定ス可シ

裁判長ハ裁判所ノ意見ニ於テ事件ノ論辨全ク
尽キタリト認ル時ハ對審ヲ閉シ且裁判及ヒ裁
判所ノ議決ヲ宣告スルモトス

第百二十八条 [全上]

口頭對審ハ原被告其訴旨ヲ申供スルヲ以テ開

クモトス

原被告ノ供述ハ不羈ノ言論ヲ以テ之ヲ為シ其
事件ノ事実上ノ關係及ヒ法律上ノ關係ヲ依セ
テ申立ツ可シ

口頭對審ニ代ヘテ唇面ヲ用フルヲ許サス但
唇面ノ明文上ニ係リテ要トスル時ニ限リ之ヲ
朗誦スルヲ許ス

代言人訴訟ニ於テハ申立ニ依リ代言人ノ外原
被告モ亦自ラ發言スルヲ許ス

〔第一解理由ノ説明〕 本訟ニ於テ其第百十九

条乃至第百二十六条ニ於テ對審ノ口頭及ヒ
口頭對審ノ準備ニ付テハ原則ヲ明示シ今ヤ

其第百二十七条乃至第百四十四条ヲ以テ口
頭对審ノ本体ニ関スル規則ヲ示スナリ
而テ本法第百二十八条第百二十九条第百四
十条ハ原告ノ位置ニ付テ規定シ其第百
二十七条第百三十条以下ニ於テハ裁判長及
ヒ裁判所ニ出廷ス可キ裁判事務官吏ニ付テ
規定ス

对審期日ハ事件ノ喚上ケテ以テ始ム〔本法第
百九十七条第一項参看〕裁判長ハ口頭对審ヲ
開キ之ヲ整理シ〔第百二十七条第一項〕又發言
ヲ許ス〔全条第ニ項〕而テ口頭对審ハ其第百
二十八条ニ依レハ原告被告其訴訟ノ要旨ヲ提

出スルヲ以テ開ク代理人訴訟ニ於テハ訴訟
ノ要旨ヲ朗讀セサル可ラサルナリ〔本法第ニ
百六十九条参看〕裁判所ハ概シテ其許旨ノ提
出ニ依リ切要ノ点ヲ知ラシタル后原告ノ
陳述ヲ始メシム而テ其陳述ニルヤ不羈ノ言
論ヲ以テシ其争件ニ付テハ事实上及ヒ法律
上ノ關係ヲ依セ論スヘキナリ特リ唇面ノ全
文ヲ朗讀スルコトヲ許サス若シ之ヲ許スモノ
トセハ口頭对審ノ顯著ナル主義ヲ失ヒ一ノ
虚式タルニ陥ルヘカラシ其他口頭陳述ニ代
テ唇類ヲ提供シテ之ニ讓ルコトヲ許サ、ルナ
リ是レ乃チ口頭对審ノ原則ト直接ナル反对

ヲ為スノミナラス遂ニ審問ハ唇面上ノ審理
ト為リ訴件ヲ親聽シテ直接ニ裁判スヘキ裁
判官自ラ之ヲ為サルニ至ラサルヲ得サル
ハカラシムル必竟口頭ニ代テ唇面審理ヲ為ス
ノ敢テ許ス可ラサルハ口頭對審ノ原則ニ於
テ止ムヲ得サル結果ナリト虽モ殊更ニ第百
二十八条第ニ項ニ之ヲ明示シタルハ乃ケ口
頭對審ノ主義ニ付テ更ニ疑惑ヲ起サレナカ
ラシカ為メナリ
其第百二十八条第ニ項ニ関シテハ既ニ水添
第七十四條及ヒ第七十五條下ニ於テ談述シ
タリ

〔第二解判定ノ沿革〕

各單按約不同ニシテ

而テ國議院委員會ニ於テ亦文第百二十八條
ニ付テハ頗ル浩瀚ナル又ハ甚ダ理會シ難キ
証各ノ採用ハ之ヲ允許セントノ動議アリシ
ニ因テ代理員ハ至適ノ唇辨ヲ為シ蓋口頭對
審ノ主義ヲ是等ノ例外ヲ明奉レテ薄弱ナラ
レムルノ嫌ヲ避ケサル可ラス故令坐女ノ例
外ニシテ實際必要ト為ス氏之ヲ裁判長ノ意
見ニ任カスヘキナリト迂ヘタリ為メニ動議
ハ排斥セラレタリ

〔第三解裁判長〕

裁判長ナル語ヲ以テ治安裁

判所ニ於テハ治安裁判官ヲ指スノ義ナリ蓋

治安裁判官ハ本訟第四百六十四條第四百六十八條ニ依リ訟律ニ習熟セサル原被告ヲ保護スヘキ權利及ヒ義務アルナリ乃チ本訟第百二十六條即チ現今ノ第百三十條ノ理由説明ニ本訟第四百六十四條ニ付テ解説シテ曰ク

本訟第四百六十四條ノ趣義ハ第百二十七條及ヒ第百三十條ノ範圍外ニ超脱シアルモノト云フヘシ蓋治安裁判所ニ於テハ訟律ヲ解セサル輩ヲ多数ニ審理ストノ事由ヨリシテ其裁判長ヲシテ單ニ事件ノ審理ヲ了スルサレムルノミナラス更ニ原被告

ヲシテ無用ニ帰セサル陳供ヲ為サレムルコトニ注意スヘキ責務ヲ負担セシムルノ必要ヲ見出しタリ必竟此規則アリトテ審問ノ原則ハ敢テ毀損セララル、一ノレ何ントナレハ即チ此規則ニシテ裁判所ハ原被告ノ陳供ヲ適訟ノ程式ニ依テ為サレメ且其陳供ニ因テ適訟ノ裁決ヲ為ス一ニ注意スヘキ趣義ヲ判裁スル所アラサレハナリ

對審期日ニ於テ靜肅及ヒ秩序ヲ保持セシムル一[茲此警視]=付テハ裁判所編制訟第百七十七條乃至第百八十五條ニ於テ規定セリ然レ氏之ニ付テ裁判長ノ裁判所ニ對スル關係

ニ於テハ太々判限セラレアルナリ
法律ノ解釈ニ依テハ裁判長タル者ノ因重ナル
職事ヲ容易ニ理會シ能ハス只実地ノ經歷
ハ唯一ノ良師ナルノミ之ニ付テ二三ノ通義
トスル所ハ本法律百三十一条第一解ニ本
府凡例及ヒ法律百三十一条第一解ニ散見シ得ヘ
シ又裁判長具職權ヲ代理セシムルニ
テハ本法律百三十一条第二解ヲ參者ス可シ
又本文法律百二十七条第四項ニ依リ裁判長審
廷ヲ開ルニハ裁判所ノ意見ニ拘束セラレ、
所ハ稍多当テラサルモノ、如シ然レハ太々
單簡ナルナリ乃ケ陪席者ノ各意見ヲ聞テ以

テ足レリトナスノミ

若シ審廷ノ會議ニ於テ或ル点ノ未タ充分ニ
審理シ了セサルコトヲ發見スル時ハ再ヒ審廷
ヲ開リ是レ本法律百四十二条ニ於テ許ス所
ナリ〔本府凡例參者〕

決議及ヒ裁判ヲ決定スル為メ會議裁判所ニ
於テハ會議ヲ開キ議決スルヲ要ス是ニ關ス
ル要件ニ付テハ裁判所編制法律百九十五条
以下ニ於テ規定セリ

裁判所編制法律百九十五条ニ依レハ會議ハ
公行スルヲ禁シアリトハ虽モ必竟此明文ニ
拘泥スヘカラサル可シ例ハ初審ノ裁判所

ニ於テハ非常ニ多数ナル缺席裁判ノ如キ之
ヲ議決スルハ陪席員等互ニ低声ヲ以テ議ス
レハ即テ席上ニ於テ決定シ得ルナリ
事四解審廷ヲ退ク可キ事將タ人民ヲ退廷セ
シム可キ事 密カニ議スハキトアルニ方テ
曰時字漏生國ノ判又帝國高等商事裁判院ニ
於テスルカ如ク裁判員ハ審廷ニ止リ代言人
及ヒ人民ヲ退廷セシムルヲ可ト為ス事抑之
ニ反対スルノ方テ可ト為ス事ハ一問題ナ
ルナリ著述者ノ自ラ経験スル所ニ依レハ即
テ事ニノ方テ寧ロ裁判所ノ威嚴ヲ失サレ
可シ殊ニ多数ノ人民在廷スル時ハ之ヲ必要

トス可シ何レトナレハ即テ其多数人ノ訟廷
ヲ出入スル毎ニ喧雜ヲ免カレサルノミナラ
ス又時間ヲ費ストアルヘシ加之裁判員ノ退
席スルカ為メ必需ノ休息時ヲ審廷ニ與フル
ノ便アルナリ
此点ニ付テ若シ帝國政府ヨリ実施規則ヲ一
般ニ施設セザルハ必ス各聯邦ニ於テ之ヲ
制定セザルヘカラス殊ニハ此規則ノ有無ニ
依テ裁判所ノ構造上裁判員ノ會議室又ハ代
言人及ヒ人民ノ休息室ノ用否如何ニ關係ヲ
及ホセハナリ新定ノ訴訟例ニハ未タ之ニ
付テ規定シアラスト虽モ而カモ此如キ一般

ニ付シ且統一ニ行ハサルヘカラサル規程ヲ
裁判廷又ハ裁判長ノ臨時ノ意見ニ放任スル
ハ蓋不可ナリ

第五解原被告 口頭対審ノ手續順序ニ付テ

ハ上ノ第一解及ヒ本合凡例ヲ看ルヘシ又訴
旨ノ申供ニ付テハ本訟第百二十一条(二)及ヒ
其註解ニ就テ看ルヘシ蓋シ本訟ニ於テ原被
告ト明記スルモノハ現ニ訴訟ヲ為ス人ヲ云
フナリ即ケ代理人訴訟ニ於テハ代理人他ノ
訴訟ニ在テハ訴訟本人若クハ其法律上代人
又ハ訴訟代人是レナリ然レモ原被告トハ往
々其代人ニ付スル本人ノミヲ指スナリ例

ハハ本訟第八十一条第百三十六条第百三十二
条及ヒ第百二十八条第百四項ノ如キ即ケ然リ
而テ訴訟訟ノ用語トシテ之ヲ解ケハ法律上
代人ハ即ケ訴訟本人ノ第二ノ我ナルヲリ本
訟第五十条第百二解第五項及ヒ第百四解參看ノ
ケ右ニ列載セル條項ニ於テモ亦原被告トハ
法律上代人ヲ包含セシメ只訴訟代人又ハ附
添人ヲ除キアルノミ本訟第百三十二条第百二

解參看

本文第百二十八条第百四項ニ掲クル權利ニ某
商會ノ簿記手又ハ支配人又ハ公有産ノ代理
委任ヲ受クル協會ノ書記モ之ヲ享有スヘキ

手トノ復向ニ対シ内閣代理員ハ谷テ曰此条ノ意義ニ於テハ其原被告ト称スルハ惣理代部理代ヲ論ヤス之ニ包含セサルナリ云々蓋茲谷辨ハ適當ナルモノ、如シ然レ凡例ハ幼年者又ハ被管理者ノ後見人合亦委發会社ノ變取ノ如キ疑乎タル法律上代人ニ及ホサ、ルハ如何ンゾヤ

兎ニ角裁判長ハ其第百二十八条第四项ヲ彼本訟第八十一条第八十六條ニ依リ代言人ノ為シタル供述ノ取消ヲ為サントスル場合ニ於ケル如キノ外ハ必ス嚴施セサルハカラサルノ要用アラサルナリ而テ實ニ其供述取消

ニ至テハ必ス真正ノ法律上代人ニシテ初メテ之ヲ為ス得ヘキノリ

蓋其第百二十八條ハ只口頭對審ノ程式ニ付テ規定スル所ニシテ其課程ニ至テハ本訟第百二十九條第百三十條ヲ以テ定ムルナリ然リ而テ茲ニ起稿ノ缺欠ト云フヘキノ即チ本訟第百三十條ニ於テ立証方法ニ關シテハ主トシテ之ヲ舉ケサル所ニ在リ抑立証及ヒ反對立証ヲ示定シ且對手人ノ立証方法ニ付テ説明ヲ為ス〔本訟第百二十九條第百三十三條解參考〕ハ原被告訴旨陳供ノ殊ニ顯著ナル條項タルハキハ更ニ裁ヲ容レサルナリ

又本法第二百五十五條第二百五十六條ノ規
則ヲ共知ニ參考セシムルハ益シ無用ニ非ラ
ス

第二百二十九條

〔辨解ノ責務及ヒ權利毀損ニ

関スルノ条

各原被告ハ相手人ノ主張スル事實ニ付テ辨明
ヲ為ス可シ

明ニ抗爭ヲ為サ、ル事實ハ之ヲ承認シタルモ
ノト看做ス可シ但原被告ノ他ノ弁明ニ因ルモ
其之ヲ抗爭セントスルノ意思ヲ發見セサル時
ニ限ル

原被告自己ノ行為ニ出ラサル事實又ハ親戚セ
サル事實ニ限リ之ヲ知了セストノ辨明ヲ申立
ルヲ許ス

〔第一解理由ノ説明

原被告ノ一方ヨリ主張

スル事實ニ付テハ他ノ一方ニ於テ解解セツ
ルハカラサハナリ而テ概シテ之ヲ視認セサ
ルノ申立ヲ為スヲ以テ十分ノ弁明ト為スハ
否ニ付テハ各場合ニ於テ裁判所ノ斟酌ニ任
カスヘシ〔北部独立聯邦單據議事筆記錄参考〕
又概シテ之ヲ承認スル時ハ其各事實ニ対シ
別ニ弁明スルニ勝サルヲ以テ敢テ一々明
言スルヲ要セサルナリ〔ハノール國單據第

百二十九条第二項北部独立聯邦草案第三百
十一条第二項參看] 原被告自己ノ行為ニ非ラ
ズ又ハ親驗セサル事實ニ付テハ原被告ハ之
ヲ知ラセスト否ニ得乃チ是レ若シ之ヲ知ル
ノ場合ニ方テハ必ズ抗争シタルモノト看做
サ、ルハカラサルナリ之ニ及シ事實ニ付キ
明ニ弁明ヲ為サズ且其原被告ノ他ノ弁明ニ
因テ之ヲ抗争セシト欲スル意思ナルヲ見
ルハキ氏ハ則チ其事實ニ付シ抗争スルモノ
ト看做シ及テ他ノ弁明ニ因ルモノ似テ抗争セ
シト欲スル企圖ノ見ルハキモノナキ氏ハ則
チ之ヲ承認シタルモノト看做スヘキナリ然

リ而テ對審ハ依令數回ノ期日ニ亘ルニ
ハテ之ヲ一箇ノ對審ト認ムヘキ原則ナルニ
依テ事實認否ノ豫審ハ其對審終結ト共ニ初
テ定ルナリ乃チ對審期日ノ數回ニ亘リ或ハ
再ニ審廷ヲ宛ル時同ハ亦訟第百四十二條參
看] 従来未ダ抗争セサル事實ニ付テ仍テ抗争
ヲ為シ得ヘキナリ蓋¹バイルン國訴訟訟第百
六十四條ウユルテムヤルグ國全上第百九十
三條ウツクセシ國全草案第三百七十一條享
編生國草案第二百九十五條北部独立聯邦草
案第三百十條ハ訟朗面訟判ニ做²テ治癒痛
劇ナル口頭ノ論弁ヲ為スニ方テハ其一言一

句ヲ記憶シ且相手人ノ反対聲明ニ於テ主張
スル事實ノ各項ニ対シ或ハ之ヲ承認シ或ハ
之ヲ拒絶シ或ハ之ヲ弁駁セサルハクラサル
ノ困難アルニ由テ此豫審ノ論決ニ付テハ裁
判官ノ意見ヲ以テ相当ノ猶豫ヲ興ヘ尙ホ明
ニ抗争セサル事實ハ之ヲ承認シタルモノト
看做シ得ルノ規則ヲ設定スルニ至レリ此規
則ハハノ一フル國草案ノ第一款會ニ於テ其
第百三十九條ノ第四項ニ之ヲ明示セントノ
建議アリレトモ其第二款會ニ至テ同國訴
訟法第百一条ニ基ツキタル所ノ承認スル
事實ノ豫審ニ関スル趣義ヲ取テ以テ明文ヲ

綴ルトニ決シタリ是レ即チ他如ク累惡ナル
豫審ノ結果ヲ裁判所ノ意見ニ放任スルハ必
竟其利害ヲ測定シ難ク且裁判所ニ委任シテ
ル訊問權[第百三十條参考]ニ依テ仮令原告
ヲ要シテ豫審ヲ為スハ酷待スルニ似タレ氏
必ス危害ヲ防遏シ得ヘレト云フノ理由ニ批
レリ[ハノ一フル國草案按議事筆記錄参考]且該草
案ノ理由トスル所ハ亦字漏生國高等裁判所
ハ幾ニト一致シテ承認スル事實ノ豫審ヲ是
認賛成スト云フコトヲモ弁述セリ
[第二款判定ノ沿革] [此部独ニ聯邦草案ニ関
シテハ上ノ第一解ヲ参考ス可シ] 各草案皆同

一ナリ而テ本条ノ第二款全ニ於テ否辨ヲ為
サ、ルニ由テ承認セルモノト認ムルハ即チ
口頭訂着ノ原則及チ本条第二百五十九条ノ
趣義ニ抵触スルモノトシテ類ニ駁談ヲ提出
シタリシモ遂ニ字漏生訟判趣義ハ勝利ヲ占
メタリ乃チ第一款全ニ於テ本条第一項及チ
現今ノ第三項〔原第二項〕ニ付テ原被告ハ必ス
弁明ス可キ責アリト云フノ理由ヲ以テ動義
アリシモ終ニ排斥セラレ且大ニ賛成ヲ得タ
ル説明ニ曰
各原被告ハ余ハ之ヲ記憶セスト陳供スル
ノ權利ヲ有ス可ク又裁判官ハ如キ陳供

ヲ以テ白状ト視做ス丁勿カル可シ
但共説明中屢本条第四百二十四条第一項ヲ
引奉レタリ

〔第三解事實〕 理由説明ニ曰

原被告ハ猶其事實ニ対シテ為ス可キカ如
ク亦私証各ノ真正ナルヲ〔本条第四百四
参考〕及チ要誓〔本条第四百十七条参考〕ニ対
シテモ辨明ヲ為サ、ル可ラス若シ其辨明
ヲ為サ、ル時ハ証各ニ付テハ之ヲ承認シ
宣誓ニ付テハ之ヲ拒絶スルモノト看做ス
ハシ云々
是ニ由テ之ヲ視ルニ本条第四百十七
条第一

二十八条ニ対スル第五解ニ説述スル如ク本
条ノ趣義ハ秋險ニシテ所謂ノ事実中ニハ対
于人ノ提出スル立証方法ニ対スル年明ヲモ
包含スルモノト理念スヘカラサルナリ

〔第四解供述ニ因テ権利ヲ毀損スル一〕(上ノ第

一解第二解参考) 蓋本条ノ規則ニ従ハサル

ニ因スル結果ニ対シテハ本条第二十九

条ニ依テ故障ノ申立ヲ為シ能ハス又本条

二百九条第二十条ニ准拠シテ権利毀損ニ

付テノ要視モアルナリ又原状回復ヲモ許サ

ス且本条第二十六条ニ依テ供述ノ取消

ハ甚ク局限セラレ、等ニ因テ觀ル時ハ本条

ノ規則ハ酷ニ過クルモノ、如シ初審ノ裁判

所ニ於テハ尚ホ本条第四十三条ニ依リ

追回レ得ルト虽モ終審ノ裁判所ニ於ケル急

慢ニ至ラハ本条第二百五十二条ニ依リ遂ニ

回復ノ途之ヲイナリ

是ニ由ルモ亦本条第三十条ノ訊問權ヲ適

宜ニ活用スルハ益裁判長及ヒ陪審裁判官ノ

責務ト云フヘシ

蓋本条第四百六十八条ニ掲ケル治安裁判所

ニ於ケル例外ハ之ヲ一般ニ通用セシムルヲ

可トヤシ然ルヲ况ヤ其治安裁判所ニ於テモ

今ハ尚ホ單ニ証唇ニ因スル例外ヲ除クノ外

此嚴酷ナル本条ノ実行セザルニ於テオヤ
今ヤ本条ニ依レハ即チ代言人タル者必ス慎
重ノ注意ヲ要シ乃チ口頭陳弁ニ方テハ其明
カニ承認セサル事實上ノ主張ニ対シ抗弁シ
宣誓ヲ認諾シ証唇ヲ承認セサルノ豫備ノ
前置ヲ明言スルヲ遺失スヘカラサルナリ
〔第五解知了セス〕〔上ノ第五解第二解參看〕 裁判
所ハ各弁等ノ判定ニ付テモ復タ本条第四百
二十四条第二項ニ依ル可キ宣誓ノ程式ニ関
スルヨリハ更ニ嚴肅ナルヘカラサルナリ畢
竟知了セスト云ヒ若クハ記憶セスト云フハ
抗弁ノ理旨ニシテ乃チ疑似兩端ノ陳弁ヲ防
止スルニ足ルモノトス程リ宣誓ノ認諾ニ付
テハ代言人ハ其訴訟本人ノ持別ナル地位ニ
基クテ亦訟第四百二十四条第三項ニ出ル
權利ヲ持スヘキ而已

第四百三十条 裁判所ノ復讞權ニ関スルノ条

裁判長ハ復讞ヲ為シテ不明瞭ナル訴旨ヲ解説
セシメ不十分ナル事實ノ申立ヲ補充セシメ及
ヒ立証方法ヲ明示セシメ概シテ事件ノ關係ヲ
確定スルニ切要ナル各辯明ハ之ヲ為サシムル
コトヲカトム可シ

裁判長ハ職權ヲ以テ査閲ス可キ事項ノ視認上

ニ係ル疑点ニ付テハ注意ヲ起サシム可シ
裁判長ハ各組合員顧問セシト欲スル時ハ之ヲ
許容ス可シ

〔第一解理由ノ説明〕

抑口頭對審ノ効用ハ必
ス寛慢ニシテ且裁敏ニ果達スル裁判事務官
ヲ俟テ初テ完全ヲ得ヘキノリ

既ニ一般ノ理由説明〔本府凡例〕ニ於テ述フル

如ク裁判所ノ裁斷タル裁判長ハ審問スル原

被告ニ對シテ黙然冷淡只ニ聽聞者トシテ着

生スヘキニ非ラス必ス其審理ヲ斷シ之ヲ發

達セシメ時トシテ其争訟ノ成立如何ニ從テ

ハ審問ノ原則ヲ範圍内ニ於テ翼賛スルヲア

ルハレ乃テ其事件ノ蘊奥ヲ尽シ審理ヲ中止

スルヲ結了スルニ至ルヲ努カシ必要ノ

ル場合ニハ後々審問継続ノ為メ直テニ聞定

ヲ示定ス可キヲ〔本府第百二十七条第ニ項

参考〕然リ而テ本条ハ後々事件ノ蘊奥ヲ尽サ

シムルノ方途トシテ裁判長〔裁判所〕ニ復同

權ヲ付與スルヲ〔ハノ一フル國訴訟法第百

十一條バデニ國全上第二百七十六條ウエル

ラムヤルグ國全上第二百一條第二百十二條

バイルン國全上第百九十四條ハノ一フル國

單據第百三十七條澳斯太利國單據第百三十

四條ハツセシ國單據第百九十八條孛漏生國

單按第百六十二條北部他國聯邦單按第百
百十一條等皆同之而シテ其復同ノ權利ハ義
務ト交互ノ關係ヲ爲シテ相分ツヘカラサル
ナリ乃チ裁判長又ハ裁判所カ復同權ヲ実行
スルニ適當ナリト確認スル時ハ之ヲ復同ス
ルノ義務アルナリ但偶之ヲ爲ヌトモ其訴
訟人ハ之ニ付キ上訴スルノ理由ト爲シ能ハ

ス〔第ニ解參考〕

又亦訟ハハノ一フル國單按第百五十九條及
ヒ北部他國聯邦單按第百十一條ニ反シテ
其爲シタル復同ニ付ヘサル場合ニ付テノ豫
審ニ付テ規定スル所ナク却テハバイルン國訴

訟訟第百五十六條ニ府シク之ニ由テ如何ノ
結果〔第六解參考〕ヲ示スヘキ事ヲ決定スルハ
一ニ裁判所任意ノ所見ニ委ヌルナリ〔亦訟第
二百五十九條參考〕且亦訟ニ於テハバイルン國
訴訟訟第百八十一條バイルン國全上第百
五十五條ウエルトムベルグ國全上第二百二
十條ノ一フル國單按第百三十八條第百三十
九條澳斯大利國單按第百三十五條以下ハッ
セシ國單按第百九十九條以下享漏生國單按
第二百六十三條以下北部他國聯邦單按第
百十二條ニ明示スルカ如ク復同ノ爲ト本人
ヲ出廷セシムルノ權利ヲモ付與スルノ如何

ニ付テ疑問ヲ起シアルヲ「然レ氏亦訟第百
三十二条ヲ参看スヘシ」
北部社乙聯邦單據第六百六十七條ニ於テ享
編生國單據第五百七十九條ヨリ採取シタレ
追加文ハ

其事タルヤ「即ケ十分ニ年明セシム候ニ完
全ニ訴旨ヲ申立テシムルヲ努トムルヲ
指ス」殊ニ原告ノ不慣熟ニ因リ權利ノ保
護完全ナラストノ悞アル場合ニ方テ彼レ
ノ「即ケ裁判官」責務ヲリトス
トアレ氏又「ハノ」フル國單據第四百五十四
条ニ於テ裁判官ヲシテ原告被告若シ自ラ之ヲ

為サ、レハ權利毀損ヲ致スヘキコトヲ訓示ス
ルノ責ニ任セシムルノ規則ト共ニ實際上其
利害如何ヲ確定スヘカラサルナリ故ニ是規
則ハ亦訟ニ採用セラレサリシ

「第ニ解判定ノ沿革」 北部社乙聯邦單據ニ関
シテハ上ノ第一解ヲ看ルヘシ候他ノ各單據
ハ亦訟ニ同シ而テ已ニ理由説明「第一解第二
項」ニ挙述スル所ノ裁判長候ニ裁判所ノ負同
權ヲ施用セサルヘカラサル義務ニ付テハ國
議院委員會ニ於テ亦条ノ行文中ニ明瞭ナラ
シメ即テ亦条原據ノ第一項第二項第三項共
ニ「得」トアリシヲ修正シテ云「ス可シ」ト命令

訟ニ改メタルナリ従テ原按第四項ニ裁判長
ハ顧問ヲ爲スニ付テ審廷ノ決議ニ従フノ義
務アリト規定シアルタル所ハ之ヲ削除スル
ニ至レリ乃ケ現今ノ本条ニテハ各陪席裁判
官ハ裁判長ノ先可ヲ俟タムシテ顧問スルノ
権利及ヒ義務アルナリ然レ氏尚ホ本条第百
三十一條ヲ参考スヘシ
而テ裁判長ハ其職權即ケ事件ノ整理ヲ他ノ
陪席裁判官ニ委託スルノ權利アルコトヲ明示
スヘシトノ動議アリシモ内閣代理員之ニ答
テ是レ固トヨリ本法律ニ屬スヘキモノニ非
ラズ寧ロ服務章程ニ屬スヘキノミナラス反

令明文ヲ以テ揭示スルコトナクモ爲シ得ヘキ
コトナリト述フルニ由ワテ其ノ動議ヲ自棄シ
タリ

然ルニ裁判所編制法ノ第二章ニ於テ其第
四十六條第二章(即ケ現今ノ第六十八條)ニ
掲クル裁判長各事件ニ付キ陪審裁判官ニ委
託スル權利ニ關スル規則ヲ削除シテ之ヲ許
サ、ルニ定メタリ乃ケ概シテ事件ヲ整理
スルハ必ス裁判長ノ特任タルヘキナリ然リ
ト虽モ尚ホ顧問權ニ於ケルト同シク又本
法第百六十一條第三章ヲモ参考スヘシ審
廷ニ於テ各職事ノ施行例ハ再ヒ審廷ヲ式

ノ如ク同クノ煩ヲ避ルル為ニ裁判又ハ議決ノ
宣告ヲ陪審裁判官ニ委スルハ敢テ妨ケサル
ナリ〔水訟第百二十七条及ヒ第百八十二条
参着〕

〔第百三解復同ノ義務〕蓋第百一解第百二解ニ依レ
ハ則チ今ハ控復同ノ義務裁判長及ヒ陪審裁
判官ニ在リトモ尚ホ各事件ニ從テ斟酌ス
ハキナリ復令適之ヲ為サス以上訴スルヲ許
サス又治安裁判所ノ審理ニ関シテハ水訟第
百二十七条第百二十八条ニ對スル第百三解ヲ
参着ス可シ
本条ニテハ原被告ニ復同權ヲ與ヘスト虽氏

〔水訟第百六十二条ハ之ニ異ナリ〕而カモ後
又原被告ハ裁判長ニ向テ對手人ノ弁明ノ不
十分ナルトモ付キ注意センコトヲ乞フノ權ヲ
モ許サ、ルニ非ラス

〔第百四解立証方法〕〔水訟第百二十八条第
百五解参着〕理由説明ニ述フル所ニ依レハ則
チ本条ノ規則ニ因テ命令上ノ立証附屬ニ生
スルノ煩ヲ避ルルニ足ルハレ乃チ原被告両造
共ニ或ル主張ヲ切要ノモノト認メス從テ其
証左ヲ提出セサルモ反テ裁判所ニテハ必要
ノモノナリト為スハ往々之アリ得ル所ナレ
ハナリ

〔第五解職權ヲ以テ〕抑職權ヲ以テ査閲スハ
キ事項トハ例ハハ訴訟能力ノ適否法律上代
理權ノ当否〔本法第五十四條第二解參看〕本人
訴訟ニ於テ訴訟代理權ノ適否〔本法第八十四
條第一解第二項及二項併ニ其註解
參看〕ノ類ヲ云フナリ

〔第六解權利毀損〕復讐ニ對シ谷并ヲ為リ、
ルモ為メニ權利毀損ヲ以テ之ヲ要迫セヌ〔上
ノ第一解第三項參看〕然レ氏其不從項ナリ
怠慢ニ付テハ本法第二百二十九條及ニ其註解
ニ從ヒ一般ノ規則ノ處分ハ之ヲ免レヌ又立
証方途ノ明示ヲ為サ、凡ソハ其主張スル所

ハ無証左ノモノトシ若シ之ニ付テ抗弁スル
場合ニハ証左ヲ視認セサルナリ乃チ裁判
官意見ヲ以テ為スヘキハ即チ右ノ如キ場合
之ナキ時例ハハ被問者ノ提出スル所不完全
ナルヲ以テ之ヲ神免セシムルカ為メニ為ス
ヘキ氏ノ類是ナリ

第百三十一條 命令及ニ復讐ヲ否ムノ條
裁判長ノ事件整理ニ関スル命令又ハ裁判長若
クハ陪審裁判官ノ為ス復讐ニ付キ對審ニ關係
スル者ヨリ不當ナリト申立ル時ハ裁判所之ヲ
判決ス

第一解判定ノ沿革及ヒ理由ノ説明 本条第
百三十条第二解第二項ニ奉述セル勅議ト共
ニ本条ノ規則ニ付テ勅議アリシ乃ケ元來裁
判長ハ裁判所ノ假定ノ全権者トシテ事件ノ
整理ヲ為ス權利ヲ施行スルニ過キスシテ固
有ノ全権者タルニ非ラス故ニ裁判長ハ其中
立ヲ專決スヘカラス必ス裁判所之ヲ為スヘ
キナリ之ヲ要スルニ裁判長ハ全権ヲ專有ス
ルヲ許サスト云フニ在リシ
然ルニ内閣代理員ハ劇ク之ヲ駁シ裁判長ノ
ル者ハ仮令本件ノ裁判ヲ言渡スニ付テハ魁
合ノ長上タラスト虽モ事件ノ整理上ニ関シ

テハ魁合ノ首長タルヘシト主張シタリシモ
遂ニ反対勅議ニ賛成多數ヲ得テ議決スルニ
至レリ

此時ニ於テ内閣代理員ハ甚々緊要ナル説明
ヲ為シテ曰抑此理由ノ説明ト稱スルモノハ
必ス集議院議員ノ理由説明ト云フヘカラス其
職務上ノ説明ノ外尚ホ學問上ニ係ル説明ヲ
掲ケアレハナリ然レ氏到底其趣義精神ニ於
テハ集議院議員ノ議決ツシタルモノアリ云
ク

本条ノ第二讀全ニ於テ当初ハ異議ヲカリシ
ニ遂ニ内閣代議員トノ議論再燃シ以裁判所

ノ判決ニ対シテハ法律上上訴スルヲ許サ、
ル¹ニ制限セント主張シタリシモ採用セラ
レズ僅ニ各其一部ヲ譲テ議定スルヲ得タリ
シ
内閣代理員ハ逆ニ聯邦各政府ノ意見ニ於テ
モ亦裁判長ハ裁判所ノ一機関ニ過キスト為
スニ同意ヲ表スルニ至レリ然ル氏ハ則テ此
紛争ハ僅ニ裁判長ノ位置ノ不羈ナル範圍
ノ廣狭上ニ止ルノミ
而テ紛議調和ノ後ニ至テ初テ「本府凡例參看」
内閣代理員ノ請求ハ過半採用セラレ本条原摺
ニ法律上トアル語ヲ削除シ更ニ「不当ノ字ヲ

追加スル¹トハナレリ

「第二解裁判所ノ判決ニ付テノ要件」本条ノ
裁判所ノ判決ヲ為スニ付テ要スル所ハ即チ
審問ニ關係スル者即チ訴訟人代言人証人鑿
定人ノ申立ニ因ラサルハカラス而テ各陪席
裁判官ハ無論復問權「本法第百三十一條參看」ヲ
有スルモ事件整理ニ関スル判定ヲ為スノ權
ヲシ且フ命令又ハ復問ヲ為スノ当否ニ付テ
ノミ申立ヲ為シ得ル義ニテ其命令又ハ復問
ノ当否ニ至テハ裁判長ノ意見ニ任カスヘキ
ナリ而テ之ニ関シテハ相当ノ抗告ヲ上級ノ
裁判所ニ提出シ得ル而已「本法第百三十一條

以下参着

又本条ニ事件整理トアルハ即ケ審理期日ニ於ケル整理ヲ云フノ義ナリ是故ニ其他法律上裁判長ニ付與シアル職權例ハ本条第百二十一条第百九十二条第百九十三条第百九十四条第百九十五条第百九十六条第百九十七条第百九十八条第百九十九条第百条第百一条第百二条第百三条第百四条第百五条第百六条第百七条第百八条第百九条第百十条第百十一条第百十二条第百十三条第百十四条第百十五条第百十六条第百十七条第百十八条第百十九条第百二十条第百二十一条第百二十二条第百二十三条第百二十四条第百二十五条第百二十六条第百二十七条第百二十八条第百二十九条第百三十条第百三十一条第百三十二条第百三十三条第百三十四条第百三十五条第百三十六条第百三十七条第百三十八条第百三十九条第百四十条第百四十一条第百四十二条第百四十三条第百四十四条第百四十五条第百四十六条第百四十七条第百四十八条第百四十九条第百五十条第百五十一条第百五十二条第百五十三条第百五十四条第百五十五条第百五十六条第百五十七条第百五十八条第百五十九条第百六十条第百六十一条第百六十二条第百六十三条第百六十四条第百六十五条第百六十六条第百六十七条第百六十八条第百六十九条第百七十条第百七十一条第百七十二条第百七十三条第百七十四条第百七十五条第百七十六条第百七十七条第百七十八条第百七十九条第百八十条第百八十一条第百八十二条第百八十三条第百八十四条第百八十五条第百八十六条第百八十七条第百八十八条第百八十九条第百九十条第百九十一条第百九十二条第百九十三条第百九十四条第百九十五条第百九十六条第百九十七条第百九十八条第百九十九条第百条

第百三十二条 原被告本人訊問ニ関スルノ

条

裁判所ハ事件ノ關係ヲ弁明セシムル為メ原被

告本人ニ出廷スルコトヲ命ジ得

第一解判定ノ沿革及ヒ理由ノ説明 理由説

明ニ於テハ原被告自身出廷ハ人間ノ自由ヲ

妨クモノトシテ之ヲ駁論セルモ本条第百三

十条第百三十一解第百三十二解参着 反テ國議院委負ハ

裁判所ヲシテ現今狀況ヲ審理シ易カラシム

ル為メ殊ニ往々不相当ノ代人ノ出廷スル迄

モ裁判所ノ審理ニ関シテハ其規則ヲ以テ必

要ナリト主張セリ又其第百三十二款全ニ於テ本条

ノ規則ハ第一裁判官ノ権力ヲ過度ニ擴張セ

シテ第百三十一款示訟ニシテ秩序レ又ハ各弁ヲ

為サ、ルモ別ニ權利毀損ノ要迫ナケレハ無

用ノ徒訟ナリトスルノ二点ヲ挙テ攻駁シタ
リシモ遂ニ採用セラレザリシ

〔第二解原告本人〕 動議提出者原告本人ニ
出廷ヲ命スルトハ只ニ訴訟能カアル者ニ限
ルノ義カ若クハ他ノ者ヲモ包含スル事トノ
旨ニ答テ曰

原告本人トハ必ズ自ラ訴訟ヲ為ス可ク
又時宜ニ依リ宣誓ヲ為ス可キ者ニ限ルノ
義ナリ

乃テ其本訟第百二十七条及ヒ第百二十八条
ニ對スル第廿解ニ照準シテ本条ニ謂フ所ノ
原告トハ訴訟能カヲ有スル者及ヒ訴訟能

カヲ有セザル者ノ法律上代人ヲ指シテ代言
人又ハ他ノ訴訟代人ノ類ヲ包含セザル義ナ
リ

〔第三解裁判所〕

裁判所ヨリ原告ヲ出廷セ

シムルハ原告ノ一方ノミニ對シ又ハ兩造
ヲ同時ニ召喚シ得ルナリ然レ其之ヲ召喚
シ得ルハ裁判ヲ為ス裁判所ニ限リ裁判長独
リ其權ヲ專有セズ而テ本訟第百六十八条
ニ於ケルト府ク受命又ハ受托ノ裁判官ノ面
前ニ出ツヘキコトヲ命シ得ルナリ実ハ受命
又ハ受託ニ付テノ動議ヲ第一款會ニ提出シ
タリシモ遂ニ排斥セラレタリ必竟其動議ノ

趣旨タルハ受命委託ニ付テ本法第二百六十
八条ニ明示セザル所ノ一種ノ特例ヲ要スル
ニ在リ而テ其取裁ハ明記シアラサルヲ以テ
之ヲ排斥シタル理由ヲ知リ准レ加之是ニ同
一ナル法律ノ応用ハ之ヲ廢棄セシメサルノ
リ蓋當時ハ國議院委負モ亦法第二百六十八
条ヲ記念スル一ノク後日終ニ該条ヲ異議ナ
ク採用シタルナリ

抑裁判所ハ疑惑ヲ除却シテスル為メ原告
本人ヲ勸解スルノ目的ニ於テ又ハ訊問ノ為
メ受命又ハ委託ノ裁判官ノ面前ニ出ツヘキ
一ヲ命シ得ルナリ恰モ此如キ懇切ヲ主トス
ル審問ニハ公然正式ノ審問ヲ用クヨリモ寧
ロ一人ノ裁判官ヲシテ為サシムルハ適当ナ
リト云フヘシ

本法第四百七十一条参看
第百四解權利毀損 本条ニ於テハ訴訟人ノ權
利ヲ毀損スルノ懲戒主義ヲ含蓄スル一ノレシ
而テ國議院委負ノ議定スル所ニ依レハ即テ
亦法第二百五十九条ニ準シ原告ノ所為ヲ
理治スルハ之ヲ裁判官ノ斟酌ニ任シテ足レ
リト為セリ此他ニ付テハ後々本法第二百三十
条第百六解ニ参述スル所ヲ茲ニモ適用シテ可
ナリ

第百五解原告ヲ訊問スルニ証人宣誓或ヲ用
ナリ

ハサルル¹ 原被告本人ヲ訊問スルニ別ニ証
人宣誓式ヲ用ヘサル¹ニ付テハ大ニ攻撃ト
賛称トヲ依セ得タル所ノ千八百七十六年ウ
イ¹ン¹府¹版¹ハル¹ラ¹ス¹フ¹オ¹シ¹ハ¹ラ¹ノ¹ウ¹ス¹キ
イ¹氏¹著¹ノ¹「¹原¹被¹告¹訊¹問¹及¹証¹人¹宣¹誓¹」¹ヲ¹参¹考¹者¹ス¹ハ
シ¹然¹ル¹ニ¹國¹議¹院¹委¹員¹ハ¹到¹底¹迄¹迄¹判¹ニ¹反¹對¹シ
アル¹ヲ¹リ¹〔¹本¹府¹九¹例¹参¹考¹者¹〕

第百三十三条 裁判所ノ權利(一)証人¹之¹提出
ニ¹關¹ス¹ル¹ノ¹条¹

裁判所ハ原被告ノ所持シテアリテ訴訟事件ニ接
用スル各証人等ニ係國各回面按察其他ノ重國
ヲ提出ス可キ¹ヲ¹命¹シ¹得¹

裁判所ハ其提出シタル各等ヲ裁判所ヨリ示定
スル時間裁判所各記局ニ留メ置クコトヲ命¹シ¹
得¹

裁判所ハ外國語ヲ以テ記載シタル各類ニ付テ
ハ宣誓シタル通事ノ翻譯文ヲ添付ス可キ¹ヲ¹
命¹シ¹得¹

第百三十四条 〔全上〕

裁判所ハ原被告ノ所持スル記録ニシテ其事件
ノ對審及ヒ判決ニ關スルモノヲ提出ス可キ¹ヲ¹
命¹シ¹得¹

第百三十五條 [裁判所ノ權利(三)臨検及ヒ鑿

定ニ関スルノ条]

裁判所ハ臨検又ハ鑿定人ノ鑿定ヲ命スルヲ得

其手續ハ原告ノ申立ニ因リ命シタル臨検又ハ鑿定人ノ鑿定ヲ為ス規則ニ従フモノトス

[第一解理由ノ説明] 復讐權アリト虽モ事件

ノ關係ヲ更ニ明瞭ナラシムルニ付テハ未タ足ラサル所多カルヘシ是ニ於テ即ケ本文第百三十三條乃至第百三十五條ヲ判定セラ

以テ裁判所ノ權利ヲ廣フレ彼ノ復讐權ト同

一ニ裁判所カ判決ヲ為スニ付キ必要ナル基

礎ヲ成サシムルヲ期シタリ蓋共權利タルヤ各訴訟訟判定訴訟又ハ同單據ニ於テモ判

定シアル所ナリ[即ケウユルテムベルグ國許

訟訟第百四條第百五條バイルン國企上

第百九十六條第百四十三條字漏生國單

據第百六十條第百六十六條第百九十九

條第百七十七條ハノレフル國單據第百四十

條第百四十一條北部独ニ聯邦單據第百十

四條第百十五條ヲ参考スヘシ]

[第二解判定ノ沿革] 本文各条ノ規則ハ各單

ヲ第百三十四条ニ付キ裁判所ノ權利ヲ更ニ
廣フシ原被告カ其事件ニ援テスル裁判記録
ハ仮令被告ノ申立テリモ提出ヲ命シ得ル
ニ依ラセシトノ動議アリシ然レ氏本訟第
百九十七条ヲ引テ以テ之ヲ排斥シタリ其
ハ更ニ異論ナカリシ

〔第百三十三條乃至第百三十五條ノ主
義〕蓋事實ノ弁明ニ因シテ裁判官ノ
須同權ヲ施用スルハ原被告ヨリ陳
供セシムルヲ以テ期スル所ナレ氏
今茲第百三十三條乃至第百三十五
條ノ規則ハ訴訟物件上ノ基礎ニ付
キ裁判官ノ心証ヲ確カメシムルヲ
期スルナリ

リ而テ其規則ニ付テハ本訟ノ審理原則ニ
違合スヘキコトヲ看過スヘカラス
〔本訟第百二十七條乃至第百二十九條第一解
參看〕是ニ於テ第百三十三條乃至第
百三十五條乃至第百三十五條ニ依
テ新タテハ攻撃若クハ弁護ノ方
途ヲ觀察スルモノト爲ス可ラス
シテ只裁判官ヲシテ原被告ノ提出
スルモノニ付キ例ヘハ專門技藝上
ノ問題ニ付テ能ク之ヲ了解シ又其
提出スル現実ノ價額ヲ斷定スル
ノ資料ニ供シ得セシムルニ在ルナ
リ乃テ例ヘハ裁判所ハ命シテ提出
セシムタル往後文書中ニ於テ原告
ノ訴求ニ對シテ已ニ被告ヨリ弁償
スル所ノモノアリ

ルヲ察見スルモ被告之ヲ供述セサル時ハ裁判所ハ取テ以テ裁判ノ原由ト為スヘカラサルナリ

裁判官ハ原告ノ提出セルモノ、範圍内ニ於テハ固トヨリ任意ノ動作ヲ為シ得ヘシ乃チ例ヘハ高業簿冊ヲ証左トシテ一方ノ承認セサル種合差引計算ノ残額ヲ請求スル場合ニテ若シ鑑定人ノ鑑定ニ於テ簿冊上其差引ハ不整頓ナル計算ニシテ而カモ正當ナル清算ヲ為セハ反テ原告ヨリ支弁スヘキ残額アルトテ証明スル代ハ則チ裁判官ハ其訴訟ヲ却下シ得ヘシ

〔第四解証各〕 証各ノ原告被告其事件ニ奉用セルモノニシテ且所持スルモノニ限第百三十三條ニ依テ裁判官提出スヘシト命スルナリ特リ第百三十三條第一項ニ列載スル証各類ニシテ証左ニ供用セズ只原告ノ陳述ヲ辨明スルノ止ルモノハ其例外ナリ

又第百三十三條第二項ニ明示シタル証各ヲ各証各ニ留置クノ規則ハ猶ホ本法第百二十五條ヲ以テ対于人ニ示諭スル規則ニ於ケルト同ク裁判所ニ訓令スル所ナリ而テ是ニ因シテハ彼ノ高法第三十九條ニ明示セル証各提出義務ノ制限規則ハ亦法實施條例第十三

余第ニ項ヲ以テ右第三十九条ヲ廢シタルニ
因リ從テ廢止セラレタルヲ記セサルヘカ
ラス乃チ支那裁判所長ニ對テ人ハ直接ニ商
業簿冊ノ閲覧ヲ為スノ權利アルナリ

〔第廿五解記録(上)ノ第ニ解參看〕 此第百三十四
条ニ於テ指ス所ハ單ニ自藏スル記録ニ限ル
ノ意ヲツ殊ニ代言人ハ記録ヲ全備シテ保有
スハキ義務アル所ノ其記録ヲリ〔本条第七十
四条及ヒ第七十五条ニ對スル第ニ解參看〕 此
記録中ニハ即チ送達証書〔本条第百七十三條
第ニ項參看〕 及ヒホタ裁判所ヨリ命セラレサル
証書層委ヲ保存レアルモトス

〔第廿六解權利毀損〕 第百三十三條第百三十四
条ニ依テ裁判所ヨリ命スル所ニ從ハサル原
被告ハ種々ノ結果ニ遭逢スヘシ代言人ナル
片ハ懲戒例ニ照シテ處分セラレ可シ其他ニ
付テハ且ク本条第百三十二條第廿四解ヲ參看
スヘシ

〔第廿七解寫換及ヒ鑑定〕 蓋寫換及ヒ鑑定ヲ為
スノ規則ヲ制定セルハ著キ進歩ト云フヘキ
ナリ今ヤ裁判官ハ敢テ原被告ノ中立ヲ俟テ
要セス自ラ之ヲ審察スルヲ果行シ得且他
ノ幫助即チ鑑定人ヲ使用シ得ルナリ又第百
三十三條第ニ項ニ付テハ本条第百三十六

条第百三十七條第百六十七條以下ヲ參
酌スヘキナリ

第百三十六條 [裁判所ノ訴訟ヲ融合スル權

ニ關スルノ条]

裁判所ハ一ノ事件ニ於テ起シタル數多ノ請求
ヲ各別ノ訴訟ト爲シテ審理スルヲ命ジ得
被告ニ於テ原告ノ請求ト法律上相連繫セサル
又對要求ヲ提出シタル時亦同シ

第百三十七條 [全上]

裁判所ハ同一ノ請求ニ連繫シタル數多ノ自
立スル攻撃方途又ハ辯護方途[起訴ノ原由抗弁
再答辯ノ類]ニ付キ先ツ其一若クハ其二ニ
限ス可キコトヲ命ジ得

第百三十八條 [全上]

裁判所ハ同時ニ對審及ヒ判決ヲ爲ス為メ其裁
判所ニ屬スル同一又ハ各別ナル原被告ノ數多
ノ訴訟ヲ連合スルヲ命ジ得但其訴訟物件ヲ
成ス請求ハ互ニ法律上連繫シ又ハ同一訴訟ニ
於テ提起シ得ヘカリシ時ニ限ル

[第一解訴訟ヲ分屬スルニ付テノ理由説明]

抑モ第百三十六條第百三十七條ハ裁判所ニ

訴訟ヲ分離スルノ權ヲ此ニ且本迄第百三十
三条乃至第百三十一条ト相待ラテ以テ口頭
對審ヲ為スヘキ訴訟ノ繁多ナルニモ拘ハラ
ス能ク其事件ノ通覽及ヒ序次ノ整理ヲ保維
シテ而シテ口頭對審ヲ實ニ成カサル可ラサ
ル必要ノ程度ニ限局スルノ豫備ヲ為スモ
ノト云フヘシ蓋口頭對審則ニ於テハ裁判官
訴訟ヲ分離シテ審理スルノ重要ナルトニ付
テハ已ニ一般ノ理由説明〔本条九例〕ニ於テ稱
賛シメリ殊ニ新定ノ口頭對審主義ニ拠レル
各訴訟迄及ヒ全章按ニ於テ悉ク其規則ヲ是
認採用シテアルナリ〔ハノールフル國訴訟迄第百
十二條ウユルテムヤルグ國全上第百二十七條
バイルン國全上第百五十七條ハノールフル國
單按第百四十三條字漏生國單按第百六十
八條第百七十一条北都拉ヒ聯邦單按第百三
百十六條第百三十七條參看〕是故ニ特更ニ理
由ノ解説ヲ要スヘキ所ハ只北都拉ヒ聯邦單
按第百三十六條ヨリ採用シタル本文第百三
十六條ノ第二項ニ付テラノヒ之アルナリ
〔第二解判定ノ沿革〕 北都拉ヒ聯邦單按ニ付
テハ理由説明ヲ參看スヘシ其他ノ各單按ハ
趣義ニ於テ同一ナリ而テ國議院委員ノ會議
ニ付テ特ニ茲ニ舉クヘキハ即テ本文第百三

十六条第ニ項ノ「法律上」ナル語ヲ削除セルニ
在リ是レ本条第ニ十三条ニ於テ削除セルニ
原因レタルノリ「本条第ニ十三条第ニ解第ニ
解参看」然レ氏後又再レ之ヲ追加シタリ且ツ
本文第百ニ十八条ニ付キ又ハ各別ナルノ語
ヲ削除シテ以テ共同訴訟ノ要迫ヲ避ケレト
ノ動議アリシモ多数ヲ以テ之ヲ實際ニ便宜
ナリトシテ動議ハ遂ニ排斥セラレタリ
「第ニ解裁判官ノ意見」本文第百ニ十六条乃
至第百ニ十八条ハ訴訟政策ニ基ツキ事件ヲ
適合スルノ権利義務ニ非ラズ「ヲ裁判所」裁判
長ニ非ラズ「ニ授照」シタルナリ

本条ノ第百ニ十六条乃至第百ニ十八条ニ於
テハ先ツ請求ナル語ヲ要求ナル語ニ相対立
スルノ趣義ヲ以テ用ヒ「是」ニ付テハ「宜」第百ニ
条及ヒ第百ニ三条ニ対スル第ニ解第ニ項ヲ参
看スヘシ「次」テ請求ノ理由ト為スヘキ方条又
ハ「是」ニ対シテ「年」護スルノ方条ヲ成ス各權利保
護ノ幫助ノ趣義ニ用ヘタリ其之ヲ幫助ノ趣
義ニ用フルノ由縁ハ自ラ叙然タルヘシト虽
モ而カモ同一ナル請求ニシテ全ク異ナル事
由ニ因スルモノ之アリ得ヘキナリ
又請求ナル語中ニハ「財産権」ニ関スル請求ト
財産権ニ関セサルモノトノ二義ヲ包含シテ

ルコヲ記スルヲ要ス〔本法第二十一条第四解
参考〕

例ハハ遺産相続ニ関スル訴件ニシテ同時ニ
遺言状相続契約及ヒ法律上相続ヲ供セテ起
ルモノアリ得ヘシ其場合ニ方テハ裁判所ハ
本法第百三十七条ニ依リ其各原由ニ依テ該
件ヲ分別シテ審理スルコトヲ命令シ得若シ又
其訴件ハ数多ノ相続請求人ニ係リ各別ニ起
シタルモノナレハ則テ裁判所ハ第百三十八
条ニ依リ其數被告ヲ合セテ審理スルコトヲ命
令シ得又遺産相続ニ関スル訴訟ニ於テ貸金
要求ノ訴ヲ為ス場合ニハ之ヲ分別シテ二件

ト為シ審理スルコトヲ命シ得ルナリ之ヲ要ス
ルニ本法第百三十六条第一項ハ訴訟物件ノ依
起ト訴訟人ノ合同ト両ツテカテ關係スル所
ナリ〔下ノ第六解参考〕

〔第三解訴件分合ノ効果〕蓋一ノ訴件ヲ分離
シ又ハ合併スルモ本々訴訟物件ノ價額ニ從
フヘキ受訴裁判所ノ權限上ニハ影響ヲ及ホ
サス〔本法第五十六条第六解参考〕然レ此之カ為メ
上告價額ヲ失却シ若クハ構成スルニ至ルハ
レ即チ其分離シタル訴件ハ各千五百コルヲ
ヲ超ヘサルモノニ付テ裁判シ之ニ反シ格別
ニ起訴シタル各訴件ヲ合セラ一時ニ裁判セ

ラレ為ニ千五百ヨル以上ノ裁判ト為リタ
ル時ノ例是ナリトス

訴件ノ分齎又ハ合儀ヲ議定シタル時ハ裁判
記録モ亦之ヲ各冊ニ別チ又ハ之ヲ一冊ニ合
セサルハカラス殊ニ各冊ニ別ツ場合ニハ更
ニ騰本ヲ以テ神充スルヲ要スルナリ必竟之
ヲ分齎スルノ判定ヲ為スト云フハ固トヨソ
取テ其事件ヲ停ムルノ意義ニ非ラサルナリ
〔本込第百三三条第百六十三三条参看〕
〔事四解反對要求〕 本文第百三十六条第ニ項
ニ對シ理由説明ニ述フル所ニ曰
濫ニ義務相較權ヲ許容シテ訴訟ノ淹滞ヲ

致スルノ危懼ヲ豫防セシカ為メ已ニ旧規
ニ普通込義務相較例第第四章第三十一條ニ
於テ不明確ナル義務相較ノ抗弁ハ之ヲ分
別シテ審理スル言渡ヲ為ス權ヲ裁判官ニ
付與シアルナリ又字漏生込判字漏生内國
通込第一篇第十六章第三百五十九條以下
参看ハ猶ホ此ニ普通込ニ於ケルト同ク若
シ義務相較ヲ本案ノ通常訴訟ニ於テ採用
セルトスルニハ其反對要求ノ差列清算ヲ
為スニ付キ明確ナルモノ又ハ差列清算シ
得ヘキモノナラサルハカラス其反對要求
ノ不明確ナルモノハ之ヲ別件トシテ特ニ

審判スルヲ及務ノ營業上ニ起因ス
ル差列清算ノ抗弁ニハ又此原則ヲ適用ス
ルナク其場合ニハ裁判官國トヨリ本案
要求ノ結審ヲ反對要求ニ先ケテ為スヘシ
トハ雖モ其裁判ハ同一ノ裁判ニ於テ之ヲ
為セリ蓋前述如乙普通法廷ニ字漏生法廷
ノ規則ハ訴訟法ノ性須ノモノナレ氏反テ
法朗西法廷即チ其民法第千二百九十一條
ニ於テハ差列清算ヲ重フシテ民法ニ定ル
要件ニ係ルモノナラサルヘカラスト為シ
且單ニ差列スルモノアリト云フノミヲ以
テハ未タ足レリトセム然レ氏又同國ノ訴
訟上ニ就テ觀察スルニ更ニ此規規定外ニ
超越ス即チ當ニ本訴ニ於テ差列清算シ得
ヘキモノヲ採用セサルノミナラス尚ホ及
務ノ契約ニ關シテモ亦差列清算ヲ結了ス
ヘキト否トニ關セサルトニ改メ此如キ契
約ニ於テハ只其同一ノ事件ニ因スル反
對要求ト相清算シ其殘剩タル積額ヲ以テ
負債ト視認セリ
蓋從來ノ訴件ヲ頻繁ナラシメ易ク且紛義
ヲ免カレサル所ノ恰當ノ差列清算ヲ要ス
ル判ヨリモ訴訟ノ淹滞ヲ防止スルニハ已
ニ往々夫ノ後未ニ望アル義務相殺ノ抗弁

ヲ許スノ判ニ於テ控訴セラルル如ク裁判所ノ
意見ヲ以テ反対要求ヲ別訴件トシテ審判
スルノ命令ヲ爲シ得ルモノトスルニ如カ
サルハ是ニ於テ即チ本訟按ニ於テハ
彼ノ差列清算ノ恰当スル判ヲ取ラズシテ
却テ訴件分離權ヲ興フルニ至リタリ然レ
氏本按ニ於テハ復々字漏生訟判及ヒ訟學
西ノ訴訟実例ニ模倣シ且尊重スヘキ訟學
者流ノ独ニ普通訟ヲ援助スル趣義ニ擬シ
其事件ヲ分離スル權ヲ只反対要求ノ本案
請求ト法律上相連繫セサル所ニ止ルニ
制限セリ是レ必竟法律上相連繫スルモノ
アル時ハ同時ニ爲ス裁判ニシテ其全般ニ
及リテ之ヲ網羅スルニ能ラサレハ能ク適
当ノ判決ヲ爲スヘカラサレハナリ
本文第百三十六條第二項ニ於テハ北部独
乙聯邦單按ニ明示スル義務相殺ノ抗弁ニ
制限スル規則ヲ採用セズ突ハ抗弁又ハ反
訴ニ依ルモ其反対要求ヲ提出スルノ程式
ニハ敢テ關係ヲ有セサルニ由ルナリ
抑本訟第二百七十四條ハ元ト北部独乙聯
邦單按第百四十一条ニ因縁シテ單ニ抗
弁ヲ以テ反対要求ヲ提出スル所ニ關セル
モノニシテ而カモ反テ本訟第二百七十三

条ニ於テハ反訴ニ認めテ為スモ妨ケザルナ
リ然レ氏又於第二百七十四条ノ成立セル
所以テ考フレハ全ク本文第百三十六条第
二項ニ明示スル原則ノ結果ナルハ争フハ
カラザル所トス乃チ於第二百七十四条ニ
於テハ對審ヲ結了セル後ニ在テモ附帶裁
判トシテ其分離ヲ判定シ得ルモノト規定
セリ

審理中又ハ結審ノ後訴訟分離ヲ言渡シ且
其本案對シ言渡サレタル裁判ヲ執行セラ
ル時ハ遂ニ義務相殺ヲ果行シ能ハサル一
方ルヘシ於弊害ヲ防遏スル為メ北部控乙

聯邦單據第四百二十一条ニ於テハ本訟第
百三十条及ヒ第二百七十四条ノ場合ニ方
テハ其本案ノ裁判中ニ於裁判ハ保証ヲ立
テシメテ執行スルコトヲ許ス旨ヲ明示スル
コトニ定メアルナリ然レ氏本訟ニテハ如
キ規則ヲ採用セズ何ントナレハ即チ本訟
ニ於テハ於第百三十六条第一項及ヒ第二
百七十四条ノ目的ヲ達セシムルニ付キ為
メニ訴訟ノ淹滞ヲ起スノ惧ナカラシメ且
被告ノ利益ヲ毀フノ危害ニ付テハ差押規
則ヲ以テ充分ニ之ヲ保護シアルヲ以テナ
リ云々

殊ニ本法ニ於テ其第百三十六条第百七十三
三条第百七十四条ヲ以テ各聯邦法ノ訴訟
上義務相殺件ニ付テハ必ス差列清算ノ恰当
又ハ恰モ清算シ得ハキヲ要トスルノ規則ハ
仮令聯邦法制ニ於テ現行スル原則法ノ性復
ト為スニモ拘ハラス全ク之ヲ廢止シタル所
ハ甚々顯著ナル所ナリ〔訴訟法実施条例第十三条参考〕
法律上相連繫ストハ上ノ第百二解参考即ケ反
對要求ノ連屬ニ付テ理會スル所ヲ指スモノ
ニシテ而カモ本法第百三十三條ニ於テハ各反
對要求ヲ抗弁ヲ以テ提出シタル時ハ其審理
ヲ拒認スル爲メ反訴ヲ起シ〔本法第百三十三條
第百三解参考〕得ヘシト雖モ本條ノ之ニ異ナル
所ハ仮令抗弁ヲ以テスルモ反訴ヲ以テスル
モ相連繫スル反對要求ハ裁判所ニ於テ分離
シ能ハス但其資復ヲ同フセサル反對要求ハ
即ケ分離權ニ從屬セサルヘカラサルナリ
本文第百三十六條第百二項ハ計善ノ抗弁ニ對
スル義務相殺ノ再答弁上ニ關係セス然レ氏
亦法ニ於テ固トヨリ訴訟ノ變更〔本法第百
三十五條(三)第百四十條以下参考〕ヲ爲シ得
ハキモノナル限リハ義務相殺ノ再答弁ヲ許
サ、凡ノ理由ナキナリ然リ而テ著述者ノ意
見ニ於テハ各聯邦ノ民法ニテ更ニ制限シテ

リタル訟判ハ訴訟訟実施条例第十三条ノ為
ニ自ラ廢停セラレタルモ、ト考フ之ニ反シ
テ第百三十七条ノ訴訟分離權及ヒ第百五
十一条ノ却下權ハ義務相殺ノ再合并上ニモ
及ホスヘキアリ

〔第五解〕第百三十七条ニ於ケル審理ノ制限〔上
ノ第三解參看〕蓋茲審判ノ制限ハ其分離シ
タル權理自護ノ幫助方法ニ付テ審理裁判ヲ
為サ、ルヲ例トス其附帶ノ裁判ヲ為スヘキ
手續タル本案終審裁判ニ於テ裁判スヘキ手
各場合ニ從テ異ナルヘシ例ハ上ノ第二解
下ニ舉述スル遺產相続ニ關スル訴訟ノ場合

ニシテ其一個ノ訴訟ニ係ルモノヲ裁判所ニ
於テ訟左アリト認メ且抗弁ニ因テ毀却セラ
レサル時ハ其訴件ニ付テハ本案終審裁判ニ
於テ裁判シ其他ノ場合ニ於テハ只其己ニ審
理シタル一個ノ訴件ニ限リ附帶ノ裁判ヲ以
テ却下ノ言渡ヲ為シ且其他ノ訴件ニ對スル
審理ハ更ニ關カサルヘカラサルアリ
然レ裁判所ハ抗弁ノ制限ヲ屢々命スヘカラ
サルアリ例ハ被告弁償ニ關スル抗弁又ハ
期滿免除ニ關スル抗弁ニ添ヘテ義務相殺ノ
抗弁ヲ提出スル氏ハ則テ其相殺ノ抗弁ハ豫
備ノ性質ノモノナリ只原告ニ於テ實ニ要求

権アル時ハ被告ハ其反拜要求ヲ計算セシムルヲ以テ足レルナリ是ニ付テハ裁判官ハ必ス他ノ抗弁ニ付テ候セテ審理判決セサルヘカラサルナリ

〔第六解連合権〕(上)ノ第二解第三解参看 本文
第百三十八条ニ付キ理由説明ニ於テ述フル所ニ依レハ即チ曰

第百三十六条第一項ニ於テハ訴訟物件及
シ訴訟人ノ相連合セル訴件ヲ分属スルノ
権利ヲ裁判所ニ與ヘアリテ而テ第百三十
八条ニテハ之ニ反シ其管轄ニ屬スル同一
ナル原被告又ハ各殊ノ原被告間ノ訴訟ヲ

同時ニ審理判決スル為メ相合依レ得ルノ
権利即チ訴訟物件又ハ訴訟人ノ連合ヲ職
権ヲ以テ命令シ得ルノ権利ヲ與ヘテリ而
テラ⁷ユルテムベク國訴訟法第百二十八条
字漏生國章按第百六十七條ニ反シ又ハ
バイルン國訴訟法第百五十七條ハノ一フ
ル國章按北部独乙聯邦章按第三百十八條
ニ依テテ各殊ノ原被告ノ訴件ヲモ亦合
候セシム得ルニ付テノ理由説明ハ既ニ本
法第百五十六條第百五十七條ノ解説ニ於テ悉
クアルナリ〔高ト北部独乙聯邦章按ノ議事
筆記録参看〕

又其第百三十八条ニ於テ原被告ノ各殊ナル
ニ付テハ必ス本訟第百五十六条第百五十七条ニ
準ル所ノ真正ノ共同訴訟人又ハ不真正ノ共
同訴訟人〔第百五十六條及ヒ第百五十七條ニ對ス
ル第百四解參看〕タル場合ノ一ヲ具備セサルハ
カラスレテ而テ本訟第百三十二條第百二項
ニ於ケル情願ト訴訟トハ之ヲ合併スヘカラ
サル界限ニ從フヘキノリ之ニ反シ本訟第百八
百三十六條ハ揭示手続ニ付テハ其第百三十
八條ノ界限ニ依ラシメサルノ規則ナリ
〔第百七解命令ノ取消〕 訴訟適合ニ因スル命令
ノ取消ニ付テハ本訟第百四十一條ニ依リ之
ヲ為シ得ハシ

〔第百八解上訴〕 訴訟ヲ分離シ又ハ合併スルノ
命令ニ對スル上訴ハ即チ本訟第百三十三條
ニ依リ只ニ本案控訴ト共ニ提出シ得ルノニ
然リ而シテ上級ノ裁判所ニ各殊ノ訴訟ヲ合併ス
ルトハ只其同時ニ管轄シアルモノニ限り之
ヲ為シ得ルハ当然トス

第百三十九條 (裁判中止ノ權ニ關スルノ條)
訴訟ノ判決ノ全部若クハ一部ニシテ他ノ訴訟
ニ於ケル權利義務ノ關係又ハ行政官廳ノ判定
ノ如何ニ從テ判断スヘキモノナル片裁判所ハ

他ノ訴件ノ終局又ハ行政官廳ノ判定ニ至ルヲ
テ對審ヲ中止スルヲ命シ得ヘシ

第百四十条 [全上]

裁判所ハ訴訟ノ進行中ニ於テ刑訟ニ触ルル處
為ノ嫌疑アリテ其治罪手続ノ本件判決ニ影響
ヲ及ホスヘキ時ハ刑事裁判ノ終ルコトヲ對審ヲ
中止スルヲ命シ得

〔第一解理由ノ説明〕 亦又第百三十九条第百
四十条ハ訴件ノ分離合依權ニ相對立シテ職
權ヲ以テ審判ノ中止ヲ命シ得ル所トス而テ
此規則タルヤ全ク各新定訴訟法及ヒ其單據

ト相符合スルヲリ〔ウユルラムヤルク國訴訟

法第六條第二百九條バイン國全上第百九
十條第百九十一條バデン國全上第二百九十
七條ハノリフル國單據第百四十五條第百四
十六條孝滿生國單據第二百七十二條第二百
七十四條北部独乙聯邦單據第三百十九條第
三百二十條第三百九十三條參看

〔第二解決定ノ沿革〕 北部独乙聯邦單據第三
百二十條第百二項第百三項ニ於テハ刑事裁判ノ
為ニ民事訴訟ノ中止ニ付キ更ニ精細ナル規
則ヲ明定シアリ其他ノ各單據ハ皆相同シ〔下
ノ第四解參看〕 又テ國議院委員會ニ於テ別ニ

異議ナカリシト雖モ独リ第百四十条ニ付キ
一委員説明シ裁判所ニ何時モ中止ノ命令ヲ
取戻シ得ルノ趣義ナルハシト考フト廣ヘタ
ルニ対シ内閣代理員ハ固トヨリ然リト答ヘ
タリ而テ訴訟ノ変更ニ付テ議論アリタルギ
内閣代理員ハ本条第百三十九条ト共第百
三十九条トノ關係ニ付テ説明シテ曰抑第百
三十九条ハ訴訟物件ノ拘束ニ関スル規則
ニシテ而テ共第百三十九条ハ一ノ訴訟中争訟
スル物件外ノ權利義務ノ關係ニ付テ問題ア
ル場合ニ対スル所アリ例ハ同一ナル事由
ヲ二個ノ各別ナル訴訟ニ於テ争フヘカラヌ
ト雖モ貸金ノ元金及ヒ之ヨリ生シタル利子
ノ要求ハ即チ二個ノ各別ナル訴訟物件ナル
ヲ得ヘシ共場合ニハ裁判官ハ利子ノ訴訟ヲ
元金ノ訴訟ノ終局スルマテ中止スヘキアリ
云々

〔第百三十三條豫審ノ民事事件又ハ行政事件〕 豫審ノ

民事事件ニ関シテハレテウド氏訴訟法註釈ヲ
看ルヘシ又是ニ付テハ例註ニ付テハ上ノ第
二解元ニ本条第百六十一條第百六十二條ニ対ス
ル第百一十一條ヲ參看スヘシ而テ豫審ノ行政事
件ニ関シテハ即チ法朗西民法第百十條ニ
依リ或ル公舎ニ寄贈金品ヲ受領スルニ付テ

ノ官廳ノ允許ノ問題アル場合ノ如キニ就テ
考フレハ自ラ執然タルハレ又帝國官吏服務
條例第百五十一条第百五十二条ヲ考察スルモ
然ルハキナリ

蓋第百三十九条ノ中止ト第二百三十五条ニ
於テ訴訟物件拘束ノ抗弁ト相混雜スヘキヲ
ス〔上ノ第ニ解參看〕乃々第百三十五条ハ新ニ
起ス訴訟ヲ却下スルノ結果ニ至ルヘキモノ
ナリ

而テ独ニ普通訟ノ豫審ノ抗弁ハ今ハ之ヲ許
サス勿カモ被告其權利ヲ保護スル爲メ本訟
第百五十一条第百六十七條ニ依リ他ノ
方訟ヲ以テスルヲ得ルナリ且第百三十九
條ハ裁判官ニ只一中止ヲ命スル權利ヲ與ヘ
タルモノニシテ其義務ヲ負ハシムルニ非ラ
ス

〔第ニ解豫審ノ刑事事件〕〔上ノ第ニ解參看〕第百
四十一条ニ於テハ民事訴訟ノ中止ヲ裁判官ノ
意見ニ放任スル趣義ナルニ因リ独ニ普通訟
元ニ各聯邦訟〔例ハ法朗西民訟第百三十
九條ニ同キモノ〕ニ在ル証偽造ノ抗弁ノ能
カヲ失ハシメタリ

又刑事ハ民事ニ勝ツトノ原則ハ訴訟法實施
條例第十四條〔一〕ニ依テ消滅シ只刑事裁判ノ

証拠カニ付テハ裁判官ノ意見ニ任カスルト
ナレリ故ニ民事裁判ノ中止ヲ必要トセサル
ナリ即チ第百四十条ニ得ノ字ヲ用ヘタリ
治罪法第百六十一条ニ依リ刑事裁判官ハ
若シ其事件ノ中止ヲ欲セサル時ハ民事裁判
ノ豫審ニ係ル点ヲ採用シ得ルカ如ク民事裁
判所ハ其裁判ノ為ニ刑事ノ豫審ニ係レル点
ヲ採テ以テ資料ト為スヲ得ルナリ

〔第五解中止〕 中止ニ付テハ本法第百二十
六条第百二十七条ヲ参考スヘシ之ニ対ス
ル上訴ニ付テハ第百二十九条ヲ参考スヘ
シ其取消ニ付テハ上ノ第百二解及チ第百四十

一条ヲ参考スヘシ抑豫審ノ点ヲ完了セサル
ニ由テ中止ノ方ニ終ルトハ即チ裁判ノ確定
其他全ク終局セル他ノ方汰例ハ和解維持
棄治罪手續ノ停止ニ因テ終ルノ趣義ナリ

第百四十一条 〔訴訟ノ分離合併中止ノ取消
ニ関スル条〕

裁判所ハ其余シタル訴訟ノ分離合併中止ニ関
スル命令ヲ再ニ取消スルヲ得

第百四十二条 〔再ニ審理ヲ命クノ条〕

裁判所ハ其余シタル再審ヲ再ニ命クルヲ命ス

ルヲ得

〔第一解〕第百四十一条ニ対スル理由ノ説明
訴件ノ高合中止ノ命令ハ素ト訴訟整理上ノ
性質ノモノナリ故ニ此第百四十一条ニ明記
スル如ク之ヲ発シタル裁判所ハ再々取消シ
得ヘシ而テ中止ノ命令ニ限ラハ本条第百二
百二十九条ニ依リ抗告ノ上訴ヲ為シテ争フ
ヲ得ヘキモノトス

〔第二解〕制定ノ沿革
本文ノ四條ハ各單按ニ
於テ皆同一ナリ又國議院委員會ニ於テ異議
ヲカリシ

〔第三解〕再々取消ス
本条第百三十九條第百
四十條第百二解ニ奉クル命令ヲ取戻スト云フ
ニ齊シク此第百四十一条ニ於ケル取消ハ只
裁判官ノ意見ニ放任スルナリ是故ニ中止ノ
命令ニ対シ抗告ヲ為シ〔本条第百二十九條
參看〕且却下セラレアル場合ニ在テモ裁判官
ノ意見ヲ以テ命令ノ取消ヲ為シ得ルナリ
〔第四解〕對審ノ再開
此第百四十二條ニ付キ
理由説明ニ述フル所ハ即チ曰

抑其訴件ハ充分ニ論弁シ了セリト裁判所
認ムル時ハ裁判長對審ヲ閉ツ〔本条第百二
十七條第百四項參看〕然レ氏判決ニ付キ會議
スル方テ改彼ノ点ニ於テハ未タ論結スル

ニ至ラサルコトヲ發見スル時ハ裁判所ハ此
第百四十二条ニ依リ既ニ閉ケタル對審ヲ
再ニ開クコトヲ命令シ得テ再ニ開クコトノ
結果ハ先キノ對審全部ニ亘リ新タニ開キ
タルモノト看做スニ在ルナリ乃チ其再ニ
開キタル所ハ其之ヲ開カシメタル点ノ外
ニ亘リ更ニ論弁シ得ヘシ云々

是ニ由テ原被告ハ本訟第百五十一条第一
項ニ準拠シ恰モ初回ノ期日ニ於ケルカ如ク
再ニ開キタル期日ニ於テ処理シ得乃チ先ニ
怠慢シタル辨明及ヒ立証方途ヲ追出シ本訟
第百二十九条參看又新事項ノ申立ヲ為スラ

允ルスナリ然リテ其再開ハ全日中ニ於ケ
ルモ又ハ他日ニ於ラスルモ更ニ差異スル所
ナシ

然レ裁判所ハ期日内ニテ例ハハ休息時トシ
テ僅ニ停息シタルノ場合ニ於テモ亦前
項ニ同キナリテ其場合ニ於テハ其期日ハ
一ノ期日ト為スナリ

又陪席裁判官カ原被告ノ論弁ノ事項及ヒ範
圍ニ付キ互ニ所見ヲ異ニスル時ハ亦對審再
開ノ原因ト為シ得ヘシ

第百四十三条 [發言ノ停止及ヒ偽稱代官人

ノ拒絶ニ関スルノ条

裁判所ハ相当ノ陳辯ヲ為スノ能力ヲ缺ク原被告代人及ヒ附添人ニ向テ陳弁ヲ為スコトヲ差止ルヲ得

裁判所ハ裁判所ノ口頭對審ヲ營業ト為ス代人及ヒ附添人ヲ拒絶スルコトヲ得

此命令ニ對シテハ上訴ヲ為スヲ許サス此条ノ規則ハ之レヲ代言人ニ適用セサルモノトス

〔第一解理由ノ説明〕 適當ノ陳弁ヲ為スニ堪

フル能力ヲキ者ハ口頭ノ對審ヲ為シ得ヘカラス是ニ於テ本条ハ各新定ノ訴訟法及ヒ其

單據〔ハノールフル國訴訟法第百六条バデン國

全上第九百九十四条ウエルトムベルグ國全

上第百十三条第二百条バイルン國全上第八

十条ハノールフル國單據第百三十六条北部独

乙聯邦單據第三百八条參看〕ニ於ケルト同ク

此如キ者ニ向テ陳弁ヲ差止ルノ權利ヲ裁判

所ニ與ヘタリ又裁判所ニ於テ口頭對審ヲ營

業ト為ス〔是レ普通用語ノ意義ニ依ルモノニ

テ敢テ其給料ニ付テノ証明ヲ為サシムルニ

及ハサルナリ〕訴訟代人及ヒ附添人ヲ拒絶ス

ルノ權ヲ裁判所ニ與フル所ハ即チ已ニ舉述

セル如ク〔本法第七十四条及ヒ第七十五条ニ

訂スル第ハ解参者偽称代官人ノ増殖ト弊風
トヲ防遏スルノ目的ニ在リ

原被告代人附添人ニ陳弁ヲ差止メ又ハ代人
又ハ附添人ヲ差延セシメタル時ハ对番ハ延
期セサルヘカラス而テ其差止メ又ハ差延ヲ
命セラレタル者其命アルニ拘ハラス再ヒ出
延シ因テ援テ差止メ又ハ差延ヲ命シタル時
其命今ハ原被告又ハ其代人ニ対シ為シタル
モノニ限り本法第百四十四条ニ準シ原被告
又ハ代人ハ副席不参セルモノト者做シ申立
ニ因リ缺席裁判ヲ為スヘシ而テ其最初ノ命
今ヲ遵奉セサル原被告ハ是ニ至テ缺席裁判

ニ対シ故障ノ申立ヲ為スノ外他ニ方兼之ア
アサルナリ〔北部社乙聯邦草案第三百二十九
条参者〕本条ニ対シ此規則ノ第一項乃至第
三項ヲ以テ裁判所ニ異ハタル權利ハ之ヲ代
言人ニ及ホサ、ルコトヲ明示セサレハ大ニ憂
悞スル所アリトノ論說喧然タリシヲ以テ其
第四項ニ於テ之ヲ明示シタリ

〔第二解判定ノ沿革〕偽稱代官人ニ関シテハ
本法第七十四條及ヒ第七十五條ニ対スル第
二解第ハ解ヲ参者スヘシ而テ各草案共ニ皆
同シ又國議院委實会ニ於テ其第一款会ニテ
ハ本条第二項ノ得トアルヲ改テ命令法ニ依

正セントノ動議アリシモ裁判所ニハ必要ト
ナス行動ノ區域ヲ廣フス。ラ良トスル駁説ノ
為メ排斥セラレタルノ外別ツニ異議ナカリ
シ

〔第三解言論ノ停止〕〔原被告ニ関シテハ本訟
事百三十二条事二解参看又代人ニ関シテハ
本訟事七十五条以下附添人ニ付テハ事八十
六条参看〕其規則ハ彼ノ事百二十七条事四項
ニ於テル代言人ノ論弁モ亦停止シ且更ニ期
日ヲ定メカサル〔上ノ事一解事二項参看〕対審ノ
終結ト相誤解スル勿レ
又裁判所ノ用語ニ関シテハ裁判所編制法事

百八十六条以下及ヒ本訟事例事十二条
ニ拠ルハキナリ〔本訟事百十九条事五解参看〕
而独乙語外ノ邦語ヲ用フルヲ裁判所ニ於
テ允許スル時其邦語ニ通スル者ハ之ヲ能ク
アルモノト為ス実ニ或ル場合ニ於テ独乙語
ヲ解セス且他邦語ヲ允サ、ル時ハ本条ニ依
テ陳弁ヲ差止ルノ一原由タルヘシ然レ氏又
是ニ付内閣代理員ノ説明ハ正当ナラサル所
アリ乃チ前記実施法事十二条ノ例外ハ指テ
論セス代言人訴訟代人附添人ハ其弁論ハ独
乙語ヲ以テ為サ、ルヘカラス之ニ及シ原被
告本人ニシテ独乙語ヲ解セサル代ハ其自國

詔ヲ以テスルヲ得ルナリ〔本法第七十五條第
百二十八條第四項〕

〔第四解延期〕延期ニ付テ理由説明〔上ノ第一

解第二項〕ニ奉述スル所ハ本法第四十條ノ

趣義ヲ以テ理由ト為シ乃々只其再々退廷又

ハ言論ノ停止ヲ命セラレタル時ハ缺席シタ

ルモト看做スノ結果ヲ生スルナリ〔本法第

百四十四條第四解參看〕

〔第五解代官人〕裁判所編制法第百七十八條

乃至第百八十一條ニ依レハ代官人假令其職

掌ヲ恪遵セサルナリ尚ホ之ニ對シ退廷

又ハ言論差止ヲ命スヘカラス必ス只之ヲ處

罰スルノ是ニ於テ本條ノ第四項ヲ明定シ

タル所トス然レハ裁判所用詔ニ關スル規則

ハ代官人ニ適用スルナリ

第百四十四條〔缺席ノ結果ニ關スルノ條〕

對審ニ關係スル者秩序ノ保維ノ為メ對審ノ席

ヨリ退ケラレタル時ハ其者任意ニ自ラ退廷シ

タルモノ、如ク之ニ對シテ處理スルヲ得又

前條ノ場合ニ於テ陳弁ノ差止又ハ出廷拒絶ヲ

既ニ前回ノ對審ニテ命セラレシ時亦同シ

〔第一解理由ノ説明〕本條第二段ニ付テハ第

百四十三條第一解第二項參看而テ理由説明

ニ依ルハ本条ハ「^一」
一条ウユルテムベルグ國全上第二百十九條
ハノ一フル國單按第百五十三條ヘツセン國
單按第二百十四條字漏生國單按第二百五十二
二条北部独乙隣邦單按第三百二十九條ニ擬
シテ裁判所獨判訟第百七十八條以下ニ準拠
シ是廷ヲ命シタルノ結果ニ付テ規定スル所
ヲリト説キ且曰

原被告ノ一方不適當ナル行狀ノ為メ是廷
ヲ命セラレ、^下ノ第三解參看且裁判所
ハ更ニ審廷ヲ命サル場合ニハ即チ其退ケ
ラレタル原被告ノ已ニ審問ヲ受タルト未

タ受ケザルトニ從テ其成果ヲ異ニスヘシ
乃テ既ニ審問ヲ受ケタル場合ニハ其未タ
提出セザルモノヲ採ラヌシテ既ニ提出シ
タルモノハ採用セラレハキナリ而テ其裁
判ハ原被告ヲ列席セシメラ宣告ス若シ又
對審ヲ継続スル所ハ是廷セラレタル原被
告ハ尚ホ未タ提出セザルモノヲ退出スル
ヲ得テ乃チ其是廷ノ期日ニ於テ既ニ對審
アリタル所ニ本ツキ言渡サレタル附帶ノ
裁判ニ因テ其提出上ヲ制限セラレ、^一ア
ル不利ヲ荷フヘシ又未タ對審アラサル場
合ニ於テハ之ヲ缺席不參ト看做シ「本訟第

二百九十八條參看]即テ申立ニ依リ之ニ對シ
シ歟席裁判ヲ言渡スナリ然レ氏原被告ノ
對審アリタルトハ何レノ日ニ以テ然リト
看做スヘキ乎ハ事實ニ付テノ疑問ニシテ
法律ノ規則ヲ以テ確定スヘカラサルナリ
[本法第百九十五條第百九十八條第百
百條乃至第百二條ノ理由説明參看]
[第百二條判定ノ沿革] 北部独ニ聯邦單據ハ其
趣義ニ於テ本條ニ同ク他ノ各單據ハ行文ニ
於テモ同一ナリ而テ國議院委員會ニテハ異
議ナク採用セラレケリ

[第百三條對審ニ關係スル者] 對審ニ關係スル

者ノ中ニハ代官人ヲモ笑ハス然レ氏裁判所
ノ退廷命令權ハ代官人ニ及ボサス[本法第百
四十三條第百五條參看]次テ証人鑑定人ナリ乃
テ此者等ノ時判前ニ退廷スルハ其規則ヲ
適用ス[本法第百四十五條第百七十四條
參看]若シ審問ヲ了リテ后退廷ヲ命セラレタ
ルハ則テ証人鑑定人^人對シテハ別ニ不利ヲ
致スナシ
代官人ニ非ラサル附添人及ヒ訴訟代人ハ原被
告本人ト同等ナルナリ而テ附帶人訴訟代人
ノ退廷ハ在廷ノ原被告本人ニ對シ其權利ノ
伸暢上ニ妨礙アルナク又本人ノ退廷セ

シメラルルモ訴訟代人ニ対シ代理權ヲ得ルナ
ナレシ之ニ反シテ被添人ハ本人ノ在ラサルニ独
リ訴訟上ノ行為ヲ理シ難キナリ〔水添第八十
六条参看〕

即ケ本条ノ趣義ハ退廷ヲ命スレハ則ケ原被
告ノ一方秩序セルモト看做シ勿ラ此場合
ニ方テハ第一解理由説明ニ奉述スル所ノ成
果ヲ致スニ在リ

又理由ノ説明ニ於テ奉述スル延期ノ權ニ付テ
ハ本添第百六条第百三条第百二条ヲ参
看スヘシ

〔第四解第百四十三条ノ再用〕 本添第百四十
三条第百四解ニ依レハ初テ該条ノ規則ヲ適用
スル所ハ只其原被告ニ費用ヲ負ハシムルノ
シニテ延期ヲ為スノ義ナリ〔本添第九十条参
看〕

再度該条ノ規則ヲ適用スルニ至テハ其順序
ニ付テ第一解第三解ニ進フルトコロニ従フ
ナリ

蓋本条ノ行文及ヒ理由説明〔本添第百四十三
条第一解第二項参看〕ニ依テ單ニ同一ナル訴
訟中再ヒスル時ニ限ル趣義ナルハ明瞭ナリ
而本条ニ付キ「対審」ノ下ニ「其同一事件若クハ
他ノ事ナルニ拘ハラヌト追ハセシト」ノ動議

アリシモ遂ニ自ラ棄却シタリ

第百四十五條 [審問調書ニ関スルノ條]

裁判所ニ於テ為スコ口頭對審ニ付テハ調書ニ記載セザル可ラス

調書ニハ左ノ條件ヲ具備ス可シ

一 對審ノ場所及ヒ日時

二 裁判官裁判所書記ノ氏名若シ通事ヲ用タル時ハ其氏名

三 訴訟ノ標号

四 出廷シタル原被告法律上代人及ヒ附添人ノ氏名

五 對審ヲ公行シ又ハ公行ヲ禁シタルハ

第百四十六條 [全上]

對審ノ手續ハ只其大要ヲ記載ス可シ

調書ニ記載シテ左ノ條件ヲ確定ス可シ

一 提出シタル訴訟ノ全部又ハ一部ヲ終了シタル承認權利拋棄及ヒ和解

二 明条ニ於テ確示ス可シト定ムアル訴旨及ヒ辨明

三 未タ聽了ラサル又ハ先キノ申立ニ異ナル所ノ証人及ヒ鑑定ノ申立

四 臨検ノ成績

五 裁判所ノ判決〔裁判裁決及ヒ命令〕但調停

ニ謄本ヲ添ヘサル時ニ限ル

六 判決ノ言渡

調停ノ附録トシテ添付シ且附録ナリト調停ニ記載シアル各案ニ記載スル所ハ調停ニ記載スルモノト同一ノ効アリ

〔第一解第百四十五條乃至第百五十一条ニ對スル理由ノ説明〕本法第百五十五條乃至第百五十九條ハ裁判所各記カ裁判所ニ於ケル口頭辯論ニ付テ記載スヘキ調停ニ關スル精細ノ規則ヲ掲ケアルナリ〔本法第百八十四條第百八十五條第百七十九條第百六十九條

条參者

其第百四十六條ニ付テハ既ニ一般ノ理由説明〔本各九例〕第五回ニ於テ解説スル所アリ而テ其條ノ〔二〕ニ付キ其実行ニ關シテハ本法第百六十九條第百七十九條第百七十七條ノ規則ヲ參照スヘシ又其第百四十七條ノ理由ニ付テハ亦既ニ一般ノ理由説明〔九例〕第十二回ニ於テ舉述セリ其條第百四十五條乃至第百五十一條ニ明定セル規則ニ付テハ別ニ詳細ノ理由説明ヲ要セス必竟其數規則ハ猶ホ第百五十一條ノ規則ニ於ケルカ如ク其行文上ニ於テ自ラ明瞭ニシテ而テ調停ニ關シテ為スヘ

キ目的ヲ規定セル而已加之各新定ノ訴訟法
[バ]デン國訴訟法第二百八十二條第二百八十
三條及ヒ其草案ニシテ原則上正義ヲ異ニセ
ザル限リハ然ヘテ同一ナリ

[而]テ第四百四十五條乃至第四百五十五條ハ治安裁
判所ニモ適用スヘキ一ハ其第四百四十九條ニ
於テ見ルヘキナリ然レ氏当ホ本法第四百七
十條ヲ參者スヘシ

[第]二解判定ノ沿革 各草案皆同一ナリ而テ
國議院委員會ニ於テ異議ナカリシ然レ氏第
二談會ニ於テ速記法ニ依テ對審ヲ直寫シタ
ルハ第四百四十六條ノ審問調卷記載ニ對スル
規則ニ応用スヘシトノ勸議アリシモ棄却セ

ラレタリ蓋当然ト云フヘシ
是カ為メ或ハ手續ノ煩雜ヲ未シ各面訴訟ヨ
リハ更ニ不良ナルヲキニ非ラサルヘシトノ
説アリ

[第]三解裁判所卷記 蓋裁判所卷記ハ審問調
卷ヲ記載スヘキモノナルヲ付テ當ニ理由
説明ニ於テ之ヲ解説スルニ止メス此部此
聯邦草案第三百六十條第二項ニ於ケルカ如
ク之ヲ法律ニ明示スルハ其第四百四十五條(二)
及ヒ本法第四百五十一條ノ明文ニ亦同クトア
ルニ因テ推定セシムルヨリモ寧ロ優レルナ

ラニ殊ニ裁判所編制法第百五十四条ヲ以テ
限定シアル裁判所管記局ノ構成ニ関スル実
地規則ニ於テ其点ニ付テハ殊更ニ注意スヘ
キ所ナル何ントナレハ即ケ審問調停ノ調製
ハ実ニ燻ル煉熟ノ官吏ヲ必需スルヲ以テナ
リ

〔第四解程式ノ適合〕 程式ノ適合ニ付テハ專
ラ此第百四十五条ノ規則ニ準スヘキナリ乃
ケ同条ニハ特ニ其要項ヲ明定セリ是レ即ケ
亦此第百五十一条ニ第五百十三条(一)(五)(六)及
七裁判所編制法第百七十条以下第百八十七
条以下ニ規レルモノトス

〔第五解口頭對審ノ科目〕(亦此第百二十四条第

一解參看) 集議院議員ノ理由説明(亦存九例

參看)ハ第百四十六条ニ規定スル所ニ從テ審

問調停ニ付テハ通常ノ審問ノ進行ハ其大要

ヲ登記シ且職權ヲ以テ或ハ特別ノ事項ニ関

シ之ヲ証明スヘキモノニ限リ登記スルヲニ

制限シ之ニ及シ裁判ヲ為スヘキ狀況ノ本末

ノ確定ニ付テハ裁判所自ラ其裁判ノ事由ト

スル中ニ明示セサルハカラサルモノトス(亦

此第百八十四条(三)參看)

又此第百四十六條第三項ハ原告ノ申立ニ

因テ為スヘキ確示ノ方此ヲ簡易ナラシメン

トスルヲ目的ト為ス規則ナリ〔本条九例参看〕
之ニ関スル他ノ規則ハ本条第百六十九条
第百七十条ニ揭示ス而テ本条第百四十六条
(二)ハ単純ナル自白ニハ適用スヘカラサル
ハ本条第百七十条第百七十条第百七十一条
ナリ

証人鑑定人ノ陳述〔第百四十六条(三)〕ハ之ヲ直
寫セスシテ其切要ナル事項ヲ明記スルナリ
然リ而テ之ニ付テハ猶モ他ノ一般ノ場合殊
ニ臨検ノ成績〔第百四十六条(四)〕ニ於ケルカ如
ク裁判長自ラ明記スヘキ又言ヲ朗言スルハ
敢テ禁シアルニ非ラサレモ法律ノ精神ニ依

レハ即テ例外ニ限リ之ヲ為スヘキナリ
治安裁判所及ヒ婚姻事件ニ関シテハ更ニ本
条第百四十七条第百四十九条ヲ参酌スル
ヲ要ス

〔第六解証據ノ登記及ヒ宣誓ノ登記〕 抑本条
ニ於テハ本条第百四十五条以下ニ明示スルモ
ノヨリ他ノ事項ニ付テ証明スルノ規則ヲ定
メス殊ニ又本条第百四十六条ハ原被告宣誓ノ
登記ニ付テ明示スルナク且本条第百四十四
十条以下ニ於テモ調停ニ付テ一言ノ以テ及
ホス所ナシ然リトモ宣誓ヲ為シ又ハ之ヲ
拒ミタルニ付テハ必ス審問調停ニ登記シ

テ説明セサルヘカラサルナリ

〔第七解調唇ノ改竄及ヒ削去〕 北部他ハ聯邦
卓按第百六十九條ニ於テ定メタル所ノ改
竄及ヒ削去ニ関スル規則ハ良法ナリトモ
少カモ亦法ニ於テハ之ヲ採用セザリシ然リ
トモ本法第百八十四條ニ照スニ如キ
方汰ヲ以テ調唇ヲ改唇スルハ兎ニ角避ケサ
ル可ラサルナリ〔本法第百四十八條乃至第百
五十條ニ對スル第四解參看〕

第百四十七條 〔証人及ヒ鑑定人ニ對スル例

外ノ條〕

支新裁判所ニ於テ審聽シ且其本案終審ノ裁判
ハ控訴ヲ許サ、ルモノナル時ハ証人及ヒ鑑定
ノ申立ハ之ヲ明記セザルヲ得キ場合ニ於テ
ハ只々其ノ審聽ノアリタルヲ調唇ニ記載ス
可シ

〔第一解理由ノ説明及ヒ判定ノ沿革〕 理由ノ

説明〔本法第百四十五條及ヒ第百四十六條ニ
對スル第一解參看〕ニ於テハ一般ノ説明〔本
凡例〕ノ第十二回ニ就テ看ルヘシト述ヘアリ
然レ氏是レ著シキ誤認ト云フハ何ント
レハ本凡例ノ第十二回ニハ本第百四十七
條〔當時ノ第百四十一條ニ付テ更ニ説明スル

所之レアラサハナリ蓋シ後ニ改正シタル千
八百七十一年及ヒ千八百七十二年ノ原按ニ
対スル一般ノ理由説明ヲ誤リ記憶シタルナ
ルヘシ乃チ是ニ依レハ控訴ニ関シテハ其手
續ヲ異ニシテ而カモ是レカ為メ証人鑑定人
ノ陳供ヲ詳細ニ直寫スルノ時間ヲ徒費シ且
猥倦スヘキ徒勞ニ対シテハ本按ノ第百四十
七条ヲ切要ノモノト為スアルナリ然リ而テ
其之ヲ誤解シアルニモ拘ハラヌ各単按ト同
一ナル次第第百四十七条ノ趣ニ千八百七十
四年ノ單按並ニ本訟原按ニ移リタリ
國議院委員會ニ於テ本条ノ趣義ヲ更ニ局限

シ若シ一席ノ対審ヲ以テ事件ノ審理ヲ結了
スル場合ニノミ應用セントノ動議アリテ逆
ニ排斥セラレタリ而テ是ハ裁判所ノ意見ニ
任スヘシ然レ氏対審ヲ延期スルニ方テハ調
停記載ヲ列ト為スヘシト議定シタルナリ
因トヨリ不適當又ハ誤認ノ理由説明ハ法律
ノ効力ヲ奪却スヘキニ非ラサルハ論テケレ
ハ即チ本条ノ効力ニ付テハ敢テ疑フヘカラ
サルヘシ

〔第二解本条規則ノ要件〕此規則ニ要スル約
束ノ其裁判ニ対シ控訴スルヲ許サ、ルモノ
トハ即チ今ハ〔上ノ第一解參看〕只控訴ノ裁判

所ク証人鑑定人ノ申立ヲ聴了リタル場合ニ
非ラサレハ之アリ能ハスル場合ニハ上告ノ
外ハ控訴ナルモノ之ナケレハナリ然ラサレ
ハ初審ノ裁判所ニ於テ抗告ヲ爲シ得ルモ控
訴ヲ爲シ能ハサル時ニ方テ証人又ハ鑑定人
ノ陳述ヲ要シタルニ外ナラス例ヘハ本条第
四十六條第百九十七條第百九十九條ニ於ケル場
合是レナリ

然レ氏前項第百二ノ場合ニ於テ苟モ濫ニ本条
ノ訴ス所ヲ利用セサルヲ可トス抗告裁判所
ニ於テモ或ル場合ニ因テ調停ヲ必要スルハ
往々之アレハナリ

而テ若シ受託又ハ受命ノ裁判官〔本条第百五
十一條第百一解及ヒ第百七十四條並ニ第百七十五
條ニ對スル註解參看〕ニ於テ証人鑑定人ヲ審
聴シタル時ハ受託裁判所〔本条第百九條第百一
解第百三解參看〕更ニ之ヲ審聴スルヲ要セス
永久ノ爲メニスル立証ニ對シテハ本条ノ以
テ適用マラルヘカラサル所ハ即チ立証ノ
目的〔本条第百四十七條參看〕及ヒ本条第百
百五十三條第百二項ノ調停ト明示スル所ニ因
テ明亮ナリ

第百四十八條 調停ノ朗讀及ヒ閱覽ニ關ス

ルノ条

調停ハ第百四十六条ノ一乃至四ニ関スル所ニ
限リ訴訟ノ関係人ノ面前ニテ朗読シ又ハ閲覧
ノ為メ之ヲ示ス可シ又之ヲ行ヒ且ツ承認ヲ得
タルト又ハ修正ヲ申立タルト其調停ニ記載
ス可シ

第百四十九条 [調停ノ署名ニ関スルノ条]

調停ニハ裁判長及ヒ裁判所書記署名ス可シ
若シ裁判長故障アル時ハ故參ノ陪審裁判官代
リ署名ス可シ若シ治安裁判官故障アル時ハ裁
判所書記署名シテ足レリトス

第百五十条 [審問調停ノ立証能力ニ関スル

ノ条]

口頭對審ニ付テ規定スル程式ノ瑕疵ハ只調停
ニ依テ之ヲ証スルヲ得ル程ニ関スル調停ノ
科目ニ對シテハ只之ヲ査閲シテ証明スルヲ
許ル

第一解理由ノ説明及ヒ判定ノ沿革 是ニ對

スル理由説明ハ本訟第百四十五条依ニ第百
四十六条ニ對スル第一解ニ於テ叙述スル所
ノ外ニ出テス而テ各章按皆同一ノ國議院
委員會ニ於テ異議ナク採用シタリ

〔第二解調各ノ朗讀及ヒ閱覽〕 此第百四十八

条ニ因テ北部独ニ聯邦草案三百六十四条

ニ明示スル如ク此正条ニ明示セサル調各ノ

科目即チ本法第百四十六條ノ第一項及ヒ其

〔五〕〔六〕並ニ第三項ニ係ルモノハ之ヲ朗讀スル

ヲ要セサルナリ

而テ調各ニシテ此第百四十八條ニ従ハサル

時ハ本法第百五十二條ニ定メタル立証ノ能力

ヲ失フナリ

治安裁判所ノ審問調各ニモ亦原被告証人等

ノ署名ヲ要セサル所ハ其証人ニ付テハ独ニ

普通法ニ符合ス然レモ各邦法ニハ之

ニ異ナル規則ヲ掲ケアルナリ

故令本法第百四十六條ニ於テ宣誓ノ登記ニ

付キ明定シアラサレ氏〔本法第百四十五條並

ニ第百四十六條ニ對スル第六解參看〕然カモ

第百四十六條〔二〕及ヒ此第百四十八條ノ趣義

ニ因リ宣誓ニ関スル調各ヲ朗讀スルハ適當

ト為シテ可ナリ

〔第三解調各ノ署名〕 裁判長及ヒ治安裁判所

ノ故障ハ之ヲ記載スヘシ而テ幾ニト一般ニ

行ハレ已ニ帝國高等軍事裁判院ニ於テモ亦

行ハレタル他ノ裁判所職員ノ署名ハ今ハ之

ヲ要セサルニ至レリ

獨逸訴訟法釋義

第十一稿

獨逸
訴訟
法
省

獨逸
訴訟
法
省

第四解調書ノ証據能力 調書ノ証據能力ニ
付テハ本法第三百八十條第一項及ヒ第三百
八十三條第一項ニ準據スヘキナリ〔本法第百
四十五條第百四十六條ニ對スル第七解參者
又裁判ノ條項ニ付テノ關係ハ宜ク本法第二
百八十五條ヲ參者スヘシ而テ審問調書ニ對
スル反對立証ニ付テハ本法第三百八十條第
二項及ヒ第三百八十三條第二項ニ參酌セシ
メ本條ヲ以テ著シク之ヲ制限ストハ雖モ実
ハ其審問調書中ニ証明シアル所ノ程式ニ係
ル規則ヲ恪遵セルト否トヲ驗審スル場合ノ
ミニ局限スルナリ此他此規則ノ遵否ニ付テ

ハ必ス審問調書ニ依テ証セサレハカラサル
ナリ〔治罪法第二百七十四條ニ於テモ同シ〕
其真偽ヲ驗審スルニ付テハ亦本法第四百
十條第四解ニ説述スル所ニ據ルヘキナリ

第五百五十一條〔訟廷外ノ審問ニ係ルノ條〕

治安裁判官又ハ受命若クハ受託ノ裁判官訟廷
外ニ於テ對審ヲ為ス時ハ裁判所書記モ亦同ク
陪席ス可シ

〔第一解理由ノ説明及ヒ制定ノ沿革〕先ツ本
法第四百十五條及ヒ第四百十六條ニ對スル
第一解ヲ參看スヘシ而テ尚ホ理由説明ニ説

述スル所ハ即チ曰

本法原案ノ用語ヲ解釋センニ「受命裁判官」
トハ其裁判所中ノ一裁判官ニテ即チ專任
裁判官ヲ云ヒ之ニ及シ受託裁判官ハ他ノ
裁判所ノ裁判官ヲ云フノ義ナリ〔治安裁判
官ニ付テハ裁判所編制法第一百五十八條參

者

北部獨ニ聯邦草案ニ於テ本條ノ規則ニ齊シ
キ規則ヲ舉ケ且其調書ニ関シ更ニ簡明切実
ナル規則ヲ定メタリ然シ孛漏生國草案ニハ
之ヲ舉ケス其他各草案ハ本條ニ同シ而テ國
議院委員會ニ於テ異議ナク採用セラレタリ

〔第二解調書〕

本法第一百四十五條乃至第一百五
十條 = 於テハ只審問調書 = 付テノニ規定ス
ル所ナルトハ歴然タリ而テ裁判所執行吏ノ
調書〔本法第六百八十二條參者〕ノ外ノ調書 =
關シテハ只本條ノ規定アルノニ蓋此缺欠 =
付キ千八百七十四年ノ原案説明 = ハ別 = 其
理由ヲ明示セヌ及テ千八百七十一年及ヒ千
八百七十二年ノ説明 = ハ曰

此他裁判所ノ調書 = 關スル規則ハ本法第
百五十一條及ヒ第六百八十二條〔當時ハ第
百四十五條第六百十九條ナリキ〕ノ特別ヲ
除キ彼ノ字漏生國草案第二百八十四條以

下北部獨乙聯邦草案第三百六十八條 = 之
アル如ク特更 = 明定スルヲ要セサルヘキ
ノミナラヌ必竟裁判所及ヒ裁判所書記ノ
調書ノ登記 = 關スル通則ヲ明舉スルハ訴
訟法 = 於テ為ヌヘキモノナラサルナリ云

此理由タルヤ已 = 治罪法第百八十五條第百
八十六條 = 付テ他ノ意見ヲ抱ク = 因テモ益
依ルヘカラサルナリ

乃チ痛悼スヘキトナレ比今ヤ裁判所編制法
第百五十四條 = 依リ大審院 = 付テハ帝國首
相 = 又他ノ裁判所 = 付テハ各聯邦政府 = 專

属スル裁判所書記ノ職制章程ヲ以テ其記載
スヘキ調書ノ程式ヲ定ムヘキモノトハ為リ
タリ而テ之ニ付テハ本法第四百十五條以下
及ヒ治罪法第百八十六條ヲ相参照ス可キナ
リ
若シ特ニ一統ノ規則ヲ制定セストナレハ則
チ裁判所ハ職制章程ノ規則ヲ適宜ニ應用ス
ルヲ要スヘカラン
而テ漸ク本條ヲ以テ裁判官自ラ調書ヲ記載
スル例ヘハ「サツクセン國ニ於ケルカ如クナ
ラサルニ至ルヲ得タリ蓋裁判官之ヲ自記ス
ルハ甚タ煩勞ニ堪ヘサルノミナラス又必要
トス確實ヲ得能ハサルノ惧アルヘキナリナ
リ」治罪法第百八十五條參者

第二節 送達

第百五十二條

送達吏及ヒ原被告ノ行事ニ
關スル條

送達ハ裁判所執行吏ニ由テ為スモノトス
代言人訴訟ニ於テハ直接ニ裁判所執行吏ニ依

託ス可シ他ノ訴訟ニ於テハ原告ノ選ニ任カ
セ直接ニ又ハ受訴裁判所書記ノ紹介ヲ以テ之
ヲ依託ス可シ

〔第一解第二節ニ對スル理由ノ説明〕理由説
明ニ於テハ本法ノ一般ノ主義ヲ擴張シテ乃
チ一般ノ理由説明〔本書凡例〕ノ意ヲ敷衍シタ
リ蓋本法ハ獨ニ普通法ノ裁判所カ職掌ヲ以
テ訴訟ヲ指揮スル制ト法朗西國ノ原告自
ラ行事ヲ為スノ制トノ中間ヲ取リタルナリ
尚ホ理由説明ニ説テ曰本法原案ニ於テハ原
被告行事ノ趣旨ニ付キ特更ニ原則上ノ明示
ヲ為サ、ルナリ何ントナレハ例ハ北部獨

乙聯邦草案第二百三十五條ニ之アル如ク此
通則ニ屬スル明條ハ幾ント理論上ノ趣意ニ
外ナラスシテ而テ之ヲ細則ニ充テ應用セン
ニハ疑惑ニ陥リ易キ所ナルヲ以テナリ然リ
而テ其趣旨及ヒ之ヲ採用セラレタル範圍ハ
各明條ニ於テ知り得ヘシ今其明條ニ依リ此
原被告自ラ為スヘキ行事ノ原則ニシテ本法
ニ於テ如何シノ景況ナルヤハ左ノ解説ニ於
テ觀察スルヲ得ヘシ即チ

〔甲〕一ノ裁判所ニ於テ訴訟ノ整理及ヒ繼
續ヨリ以テ裁判ニ至ル手續

抑本法ニ於テ規定スル所ニ依レハ凡裁判所

ニ於テ訴訟ヲ整理スルニハ必ス裁判所ヨリ
對審期日ヲ指定シテ訴訟人ヲ幫助スルヲ例
トス〔本法第百九十一條第百九十三條第百
三十三條第百五十五條(三)第四百五十六條第
百五十八條第四百七十九條(三)第五百六條第
五百十五條(三)第五百二十九條第五百四十八
條第五百七十條〕而テ訴訟ニ口頭對審ヲ開
クニ至レハ則チ裁判所ハ其對審繼續ノ為メ
又ハ受訴裁判所若クハ他ノ裁判所ニ於テ証
據審査ノ為メ必要トスル期日ヲ指定スルノ
規則ナリ〔本法第百二十七條第百三十八條第
百三十九條第百四十四條第百四十六條第百
四十七條第百五十二條第百五十五條第百
五十七條第百六十二條第百六十五條第百
六十七條第百七十一條第百七十三條第百
七十五條第百七十九條第百八十二條第百
八十四條第百八十六條第百八十八條第百
九十條第百九十四條第百九十六條第百
九十八條第百九十九條〕又ハ鑑定人ヲ呼出シ又
ハ他ノ官廳ニ在ル所ノ証書類ヲ借覽スルハ
裁判所ノ行事ナリト定ム〔本法第百四十二
條第百六十七條第百九十七條第百四十五
條第百六十七條第百八十五條第百五
十六條第百八十五條第百二十條

〔七〕送達ノ手續

第一 本人訴訟ニ於テハ原告ハ裁判所書記
ノ紹介ニ由リ送達ヲ行フヲ依託シ得本
法第五百十二條第二項且其書記ニ於テ之
ヲ行フハ原告ヨリ之ニ反對スル申立ヲ
為サ、ル場合ニ限ルナリ〔本法第五百十四
條第四百五十八條〕

第二 治外法權者ニ對スル送達外國ニ為ス送
達及ヒ公然ノ廣告ヲ以テ為ス送達ハ原被
告ヨリ其次ノ第三ノ場合ニ非ラサル限リ
ハ之ヲ申立テ依託スヘシ然ル時ハ職權ヲ
以テ之ヲ執行シ〔本法第八十二條以下第
百八十六條以下〕且裁判所執行吏ニ由ル
ナシ

第三 宣告ヲ為サ、ル裁判所ノ議決及ヒ指令
ハ原告ノ申立ヲ要セス職權ヲ以テ送達
ヲ為ス〔本法第二百九十四條〕

〔丙〕強迫執行ノ手續

強迫執行ニ付テハ裁判所ノ訴訟人ヲ幫助ス
ヘキ範圍殊ニ大ナリ〔本法第六百八十四條以
下第六百八十七條第六百九十六條第七百四
條第七百五十八條以下第六百九十八條以下
第七百二十九條以下第七百五十五條以下第
七百七十二條以下第七百八十條以下第八百

八條以下其他ヲ參者ス可シ
而テ本人自ラ為ス行事ニ付テハ又屬吏〔裁判
所執行吏〕ヲ置テ分掌セシムルヲ要スルノ規
則ナリ是レ即チ裁判官ノ屬僚ニハ非ラサル
者ナリ〔此制タルヤ之ヲ獨乙旧法制ニ於ケル
裁判所使吏ノ單ニ裁判官ノ一器具タルニ過
キサルモノニ比スレハ更ニ自立自主ノ位置
ヲ保有セシメ乃チ各場合ニ於テ裁判所ヨリ
下シタル命令ニ從フノミナラス尚ホ且訴訟
人ノ依託ニ因リ其之ヲ法律ニ照シ當ニ為ス
ヘキモノト否トヲ自ラ審査シテ而カモ自ラ
其責ニ任シテ依託ニ應シ之ヲ執行セサルヘ

カラサルノ趣義ヲ以テ定メタリ

即チ本法ニ於テ定ムル執行吏ノ職權ハ民事
訴訟ニ係ルモノニシテ而テ

送達ノ執行〔本法第一百五十二條第一百五十三

條

呼出狀ノ調製〔本法第四百六十條第四百七十

三條

強迫執行但裁判所ノ特權ニ專屬シアラサ
ルモノニ限ル〔本法第六百七十四條

ノ三項ニ制限スルナリ

又裁判執行吏ノ職務上ノ關係及ヒ行事上ノ
關係ヲ規定スル細則ハ之ヲ裁判所編制法第

百五十五條 = 於テ各聯邦司法部 = 委付シ此
他 = 付テハ只法律上執行吏ノ職務 = 屬セシ
ムヘカラサル場合ヲ限テ規定セリ 本法第百
五十六條 然リ而テ其以テ然ラシメタル所ノ
理由ハ裁判所編制法第百五十五條第百五十
六條 = 對スル理由説明中 = 纏シアレハ宜ク
就テ者ルヘシ

本法第百七十六條 = 於テハ裁判所執行吏 =
由ルノ送達ノ外又郵便 = 由テ送達スルノ規
則ヲ採用ス
又電信ヲ以テ送達ヲ為スノ試驗ヲ行ヘタレ
ル未タ其成績ヲ見ニ至ラス蓋今ニ至ルマテ

此必要ヲ發見セサルナリ 然シ「バデン」國訴訟
法第百十四條ヲ參者スヘシ

新定ノ訴訟法及ヒ同草案 = 於テハ訴訟上ノ
行為ヲ原被告本人ノ自行 = 付スルノ制ナリ
ト虽又其送達ハ裁判所執行吏 = 由ラシムル
ナリ ハノ「フル」國訴訟法第百十八條バイル
ン國全上第百一條ハノ「フル」國草案第百五
十五條序漏生國草案第百四十二條參者 獨リ
北部獨乙聯邦草案ハ訴訟事件ノ屬シアル又
ハ屬スヘキ裁判所ノ書記ノ指揮 = 依リ使丁
ヲシテ送達ヲ執行セシムルノ規則ヲ立テ 其
第百五十六條 且此他裁判所執行吏 其第

百五十七條]及ヒ公証人[其第二百六十二條] =
於テ送達ヲ為スヲ許ルスノ規則ヲ定メアル
ナリ然レモ全獨乙國ニ施行スル法律ニシテ
此如ク執行機關ノ區々異同アルハ固トヨリ
宜カラス必スヤ統一ナル執行機關制ヲ設テ
以テ原被告本人ヲシテ送達ヲ為サントスル
ニ方テハ何ンタル方法ニ據ル可キ乎ヲ知リ
易カラシムルヲ要ス而テ北部獨乙聯邦草案
ノ強迫執行ハ自立ナル執行吏[裁判所執行吏]
原被告ノ依託ニ應シ且原被告ニ對シ責任ヲ
負フテ之ヲ果行スルノ制ノ如キハ甚ク繁雜
ト云フヘシ[其第九百八條]乃チ此制ニ依レハ

原則上同一ナル機關ヲシテ掌ラシムヘキ事
務ヲ各種ノ機關ニ委託シ且自立セサル送達
吏ノ外ニ自立ノ執行吏アルニ至ルナリ此他
送達制ヲ裁判所書記局ノ指揮ニ委ヌル所ハ
必竟裁判所ヲシテ其必要ナラサル事務ヲ負
担セスシテ其責任ヲ輕フセシムヘキ目的ニ
反對スト云フヘシ
又新定訴訟法及ヒ同草案中郵便ニ由テ送達
ヲ為スノ制ヲ採用シタルハ獨リ北部獨乙聯
邦草案ノミナリ
蓋郵便ニ由テ送達スルト郵便ニ依託シテ送
達ヲ為ストハ自ラ其義ヲ異ニスルナリ[本法

第百六十一條第百六十四條第百七十一條第
百七十五條參看]乃チ郵便ニ依託スルニハ若
シ之ニ服從セサル怠慢者ニ對シテハ嚴格ナ
ル豫審ノ處分アルヘキ義ヲ包含シアリテ而
カモ怠慢ナル原被告ノ法律上ノ送達受取人
ト認メ書面ヲ郵便ニ託スルト共ニ送達シタ
ルモノト者做シ其書面ノ宛名ノ者ニ達スル
ト否及ヒ何時ニ達スヘキトハ敢テ問ハサル
ノ趣義ナリ

〔第二解第百五十二條第百七十六條ニ對スル
理由ノ説明〕原被告ノ處為又ハ裁判所ノ命
令ニ因リ原被告又ハ第三者ニ送達ヲ為スヘ

キ時ハ裁判所執行吏又ハ郵便ニ由テ之ヲ為
スナリ而テ本法第百八十一條第百八十二條
以下第百八十六條以下ニ掲クル特別規則ハ
即チ便宜ヲ主トスルニ出ルナリ而テ代言人
訴訟然レモ又本法第百八十一條第二解ヲ參
省スヘシニ於テハ其代言人タル公然ノ地位
ト共ニ法律ニ通曉シ法律ヲ遵守スルノ保証
アルモノト定ムルモノニシテ仮令代言人間
直接ニ應答スルニモ亦自ラ法律ニ據ルヘキ
ハ論ヲ俟タヌ乃チ代言人ニ送達スル片ハ一
時ノ受領証ヲ出スヲ以テ足レリト為シ以テ
裁判所執行制ニ因ル費用ヲ出サスレテ為シ

得へキナリ又外國ニ為ス送達又ハ公然ノ廣告ニ依テ為ス送達ハ裁判所ノ職權ヲ以テ之ヲ為ストセハ即チ原被告ヲシテ勞働時日及ヒ費用ヲ節減セシメ得ルナリ

〔第三解制定ノ沿革〕 北部獨乙聯邦草案ニ關

シテハ上ノ第一解ヲ參者ス可シ又郵便ニ託シテ為ス送達ハ已ニ凡例ニ在ル如ク千八百七十四年ノ草案ニ於テ初テ採用スル所トナレリ此他ニ付テハ各草案皆同一ナリ

裁判所使丁及ヒ使部制ニ代ヘテ自立ナル裁判所執行吏ヲ置クノ主義ハ本法原案ニテ單ニ刪除セラレ裁判所編制法第一百五十五條第

百五十六條ノ議定ニ於テ初テ之ヲ採用スルニ至レリ

代言人訴訟ニ於テ代言人ハ裁判所書記ニ由テ呼出ヲ請求レ得ヘシ然ル片ハ其呼出ハ到底裁判所ニ由ルヘキモノナルカ故ニ之ヲ許サントノ勅議アリシモ棄却セラレシ又第二讀會ニ於テ再ヒ提出セラレタル所ノ代言人訴訟ニ於テ裁判所執行吏直チニ原被告ニ示命レ得ル丁ヲ禁セントノ勅議モ亦棄却セラレタリ

又送達ハ悉ク郵便ニ由テ為スノ制ニ定メントノ勅議アリシモ獨リ郵便ノミニ由テ實際

ニ施行シ能ハサルヘシト云フノ理由ニテ賛成ヲ得スシテ止ミタリ

〔第四解裁判所執行吏〕上ノ第一解乃至第三解

及ヒ本書凡例參看 裁判所執行吏ノ特定裁

判管轄ニ付テハ本法第三十四條又費用ニ付

テノ裁判ニ関シテハ本法第九十七條又其能

力ノ有無其他ニ関シテハ本法第四十五條ノ

第五解外國ノ裁判執行吏ノ責務ニ関シテハ

裁判所編制法第六十一條ヲ參看ス可シ

送達ヲ裁判所執行吏ニ由テ為スト及ヒ郵便

ニ由ルト郵便ニ由ルモ尚ホ本法第七十七

條ニ依リ裁判所執行吏ハ關係スルナリノ関

係ハ必スヤ純然タル原告ノ任意ニ付スル

ノ制ニハ非ラサルナリ然ルニ本法第七十

六條ニハ「為シ得」トアリ之ニ及シ本條ニハ「由

テ為スモノトス」トアリ必竟原告ニシテ特

ニ止ラ得サル事由ナクシテ裁判所執行吏ニ

由テ送達ヲ為シ得ル限リハ必ス其費用ノ多

キヲ避クルハ原告ノ特權ト為サ、ルヘカ

ラヌ〔本法第八十條參看〕又本法第七十六

條ノ文意ト本條ト相適合セサル所アルハ必

竟後日ニ郵便送達ノ制ヲ採用シタルニ由ル

ナリ〔上ノ第三解參看〕而テ裁判所執行吏ハ各其職務上ノ管轄區ヲ

有スルカ故ニ送達ヲ依託スルニハ必ス其名
 宛人住所ヲ管轄スル執行吏ニ為サ、ルヘカ
 ラス〔本法第百六十條以下參者〕又本法第百七
 十七條ノ場合ニ付テハ其之ヲ發付スル地ニ
 住スル各執行吏ノ管轄ニ屬ス〔本法第百七十
 七條乃至第百八十條第四解ニ舉ル第百七十
 七條ニ對スル理由ノ説明ヲ參者スヘシ〕
 〔第五解受訴裁判所及ヒ本人訴訟〕本條ノ末
 段ハ即チ本法第七十四條第二項ノ場合ニ相
 關係スル所ナリ而テ受訴裁判所トハ訴訟ノ
 屬スル又ハ屬セサルヘカラサル裁判所ノ義
 ナリ〔本法第百九條第一解第三解參者〕又此場
 合ニ於テハ原被告自ラ執行吏ニ依託スル
 ヲ明言セサル以上ハ必ス裁判所書記ノ紹介
 ヲ經ヘキナリ〔本法第百五十四條參者〕

本人訴訟ニ於テ原被告本人ノ裁判所書記ト
 相交通セシムルノ規則ヲ設タルヤ必竟從來
 ノ經驗ニ因リ法律ニ通曉セサル輩ヲシテ裁
 判所ノ保護ヲ得セシメントスルニ在リ又本
 法第百五十七條第四百五十八條第四百六
 十二條ノ規則及ヒ理由ノ説明ニ於テ「假性ノ
 依託」ト名ケ且本法第百七十九條ニ於ケル郵
 便送達ノ規則ヲ以テ之ヲ補充スル所ノ本法
 第百五十四條ノ規則ハ蓋前段ノ趣義ニ因

所トス

第一百五十三條

〔送達ノ依託ニ關スルノ條〕

裁判所執行吏ニ送達ヲ依託シ又ハ裁判所執行吏ニ依託スルヲ裁判所書記ニ委任スルハ原被告口頭ノ申立アルヲ以テ足レリトス
裁判所執行吏送達ヲ為シタル時ハ反對ノ証據アルマテハ原被告ノ依託ニ因リ之ヲ為シタルモノト看做ス可シ

第一百五十四條

〔全上〕

裁判所書記ノ紹介ニ依テ送達ヲ為シ得ヘキ時ハ書記ハ裁判所執行吏ニ其要トスル送達ヲ依託ス可シ但原被告自ラ裁判所執行吏ニ依託セシトテ申立ル場合ハ此限ニ在ラズ

第一百五十五條

〔全上〕

原被告ハ裁判所執行吏ニ送達スヘキ書面ノ原本ト共ニ送達ヲ受クヘキ人貞ニ當ル謄本ヲ交付ス可シ若シ裁判所書記ノ紹介ニ由ル時ハ書記ニ之ヲ交付ス可シ
之ヲ交付シタル日時ハ其原本及ヒ謄本ニ明記ス可シ若シ原被告領收証ヲ要ムル時ハ之ヲ與フ可シ

第百五十六條 [送達ノ種類ニ関スルノ條]

正本ヲ以テ送達ヲ為スヘキ時ハ其正本ヲ交付
シ此他ノ場合ニ於テハ送達スヘキ書類ノ証明
シタル謄本ヲ交付ス可シ

証明ハ裁判所執行吏之ヲ為ス代理人ノ依託ニ
因リ又ハ代理人訴訟ニ於テ送達スヘキ書類ハ
代官人之ヲ証明シ職權ヲ以テ送達スヘキ書類
ニ付テハ裁判所書記之ヲ証明スルモノトス

[第一解理由ノ説明] 本文第百五十四條ニ付

テハ本法第百五十二條第五解ヲ參看ス可シ
而テ本文第百五十三條第百五十五條第百五

十六條ニ對シ理由説明ニ於テ解説スル所ニ
曰

各送達ニ於テ關係アル人算ハ

(甲) 其人ノ為メ送達ヲ行フ者即チ送達人

[本法第百七十四條(三)]

(乙) 送達ヲ受クヘキ者即チ送達受領人[本

法第百七十四條(三)]

ナリトス然リ而テ本文第百五十三條第百
五十五條ニ於テハ送達ヲ為ス為メ之ヲ行
フ者ノ行為ニ付テ規定スル所トス抑裁判
所執行吏依託ヲ受ケスレテ自ラ之ヲ專行
スルトハ決シテ之レアラスト虽モ然カモ

本法第六百七十六條ノ規則ト同レク必ス口頭ノ申立ヲ以テ裁判所執行吏ヲシテ送達ヲ実行セシメ又ハ之ヲ允可シ得ヘキ場合ニ於テ裁判所書記ニ裁判所執行吏ヲシテ送達ヲ為サシムル依託ヲ委任シ得ル所ニテ其送達受領人及ヒ第三者ニ對シ別ニ依託証書〔委任狀〕アルヲ要トセサルナリ此規則タルヤ「ハノール」國草案〔第一百十三條〕字漏生國草案〔第一百四十七條〕澳斯太利國草案〔第一百六十條〕北部獨乙聯邦草案〔第二百六十條〕ニ相適合シアリテ實ニ原被告ヲシテ訴訟ヲ為スニ努トメテ簡便ナラシムルヲ

要トスル所ニ淵源セルモノナリ
蓋裁判所執行吏ナル者ハ自ラ公然ノ信用ヲ保持スルヲ以テ反對ノ證據明白ナルマテハ其為シタル送達ハ實ニ之ヲ欲シタル原被告ノ依託ニ因レルモノト看做スハ當然ナリ〔本法第六百七十六條參看〕
送達ヲ為サントスル一方ハ送達ノ為メ其書類ノ原本〔例ヘハ訴狀ノ原案〕及ヒ其謄本若シ又數名ノ人ニ送達スル時ハ其人負ニ相當スル謄本ノ負數ヲ交付スヘキナリ蓋此民法上訴訟法上必要ナル送達ニシテ單ニ一片ノ謄本ヲ以テセスレテ更ニ其謄本

ハ原本ト相異ナル所ナキトテ証明シテ以テ受領人ニ付與スルノ規則ハ尤モ適當ト為スヘキナリ

[バイルン國訴訟法第二百三條第四項北部獨乙聯邦草案第二百五十一條第二百五十五條參看]又代言人訴訟其他代言人ニ於テ送達ヲ為スヘキ各場合ニ於テハ代言人之ヲ証明シ此他ハ送達ヲ施行スル裁判所執行吏之ヲ証明スルナリ

[然レ本法第七十九條ヲ參看スヘシ]

[第二解制定ノ沿革] 本法第二百五十二條ノ第一解ニ舉述セル北部獨乙聯邦草案ノ別異スル所ノ外ハ各草案皆同一ナリ

本文第一百五十五條ノ第二項ニ付テハ是レ職務章程ニ屬スヘキモノナリトノ異論アリシモ國議院委員ノ追加スル所ニシテ乃チ原被告及ヒ對手人ヲシテ裁判所執行吏ニ對シ自衛セシムルノ趣義ニ出テタルナリ又本法第一百五十四條ハ其第七十九條ニ對スル關係ノ理由ヲ以テ異議アリタリ蓋理由ナキニ非ラス

[下ノ第四解參看] 然レハ遂ニ行ハレスニテ止ミタリ

又本文第一百五十六條ハ原案ノ第一百四十九條甲トシテ國議院委員ノ起稿委員ニ於テ追加シタル所ナリ然レハ其審問調書ニ関シテハ

更ニ說明ヲ為サス而テ第百六十六條(即チ現
今ノ第百七十三條)ハ大ニ修正セラレ其第三
項ニ因テ此第百五十六條ヲ制定シ以テ原案
ニハ曾テ送達ハ何物ヲ以テスル乎ヲ直接ニ
明示シアラサル缺欠ヲ補正スルノ目的ナリ
本法第百七十二條乃至第百七十五條ニ對ス
ル第二解參者

第三解裁判所執行吏ノ資格 抑本文第百五
十三條ハ裁判所執行吏カ送達ヲ發スル者ト
送達受領人トニ對スル關係ノ別異ヲ示セリ
上ノ第一解參者乃チ其送達依託人ニ對シテ
ハ裁判所執行吏其依託ヲ受ケサレヘカラス
然レモ其依託タルヤ口述ヲ以テ足レリトス
ル所ニシテ而カモ例ヘハ其送達スヘキ書類
ニ別ニ依頼書等ヲ添ヘス之ヲ交付スル如キ
結局ノ處置ヲ以テ足レリト為スナリ

其第三者ニ對スル所ハ送達發付人ノ依託如
何シノ嫌疑アル場合ヲ察シタルヨリ反對証
ヲ以テ之ヲ斥クルノ規則ヲ設ケタリ

第四解裁判所書記 本法第百五十三條ニ依
リ裁判所書記ハ原告ノ申立ヲ要スル義ニ
シテ而テ第百五十四條ニ依リ第百五十二條
ノ末段ノ場合ニ於テ原告之ニ反對スル申
立ヲ為サ、ル限リハ則チ法律上有効力ノ代

人権ヲ有スルナリ〔本法第一百五十二條第五解
参着〕是故ニ原告ヨリ別ニ申立ナキ以上ハ
書記ハ送達ヲ執行スルノ處置ハ送達發付人
又ニ其受領人ニ對シ法律上有効ナルナリ
獨リ怪ムヘキ所ハ乃チ本文第一百五十四條ニ
依レハ裁判所書記ノ裁判所執行吏ニ依託ス
ヘキ規則ヲ明示シ反テ本法第七十九條ニ
於テハ直接ニ郵便ニ託シ得ルノ權利ヲ與ヘ
アル所是レナリ而テ此裁判所書記ニ關シテ
ハ本法第一百五十二條第三解又ニ第七十六
條乃至第一百八十條ニ對スル第五解ヲ参着ス
可シ

〔第五解送達スヘキ書面〕上ノ第一解第三項及
ニ第二解参着 蓋本文第一百五十五條第百五
十六條ノ趣義ハ本法第二百一十一條(六)及ニ第
百七十三條第二項第三項ト相連繫シテ左ノ
如ク理會スヘキナリ即チ送達スヘキ書類ト
ハ〔其正本ヲ除キテ〕送達受領人ニ示レテ返却
セシムヘキ正本ヲ云フニ非ラスシテ受領人
送達ヲ受テ握有シ置クヘキ原本ヲ云フナリ
乃チ送達受領人ハ只其原本ノ謄書〔本法第百
二十二條参着〕即チ交付シ置クヘキ書類〔本法
第六十條及ニ第六十一條ニ對スル〕第二
解参着ヲ留置クカ故ニ本文第一百五十六條第

二項ニ於テ其謄本ニ証明スルヲ命令スル所
ナリ本法第二百二十四條第二解及ヒ第百八十
六條乃至第百八十九條ニ對スル第六解參者
乃チ獨ニ普通法ニ於テ謂フ所ノ書類交付ト
ハ亦副本ノ送達ヲ為スノ義ニシテ而テ其原
本ハ之ヲ裁判所ニ留メ置クナリ之ニ及シ本
法第二百二十四條ニ依レハ裁判所モ亦其謄本
ノミヲ留メ置キ第百七十三條ニ依リ其原本
ハ送達發付人ニ返付スルナリ
原本及ヒ謄本ノ此如キ關係ニ付テハ即チ其
ニ書類間ニ差異スル所アル場合ニ方テ甚ク
切要ナルヘレ

相當スル頁數 本文第二百五十五條 本法第百

七十二條ニ基ツク一定ノ場合ニ關係ヲ有ス

ルナリ 本法第百七十二條乃至第百七十五條

ニ對スル第三解參者

第六解職權ヲ以テ 本文第百五十六條ハ本

法ノ法制 本法第百五十二條第一解第二百八

十八條第一項及ヒ北部獨ニ聯邦草案第二百

三十五條參者ニ於テ或ル例外ノ場合ヲ指ス

モノナリ乃チ婚姻事件又ハ後見事件候ニ本

法第二百九十四條第三項ニ於テ原被告ノ申

立ナク送達スヘキ裁判所ノ命令及ヒ裁判ノ

場合是レナリ此場合ニ於テハ裁判所ハ送達